

文部科学省委託調査研究事業

平成 26 年度

総合的な教師力向上のための調査研究事業

報告書

玉川大学

本報告書は、文部科学省の委託調査研究事業として、玉川大学が実施した、平成 26 年度「総合的な教師力向上のための調査研究事業」の成果を取りまとめたものです。
したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

はじめに	1
第1章 事業の概要	
1. テーマ	2
2. 実施体制	2
3. 課題認識	2
4. 現状の取組	2
5. 調査研究の目的	3
6. 調査研究の具体的な内容・取り組み方法	3
7. 調査研究における教育委員会との連携	5
第2章 平成26年度 小学校二種免許状取得に関するプログラム	
1. 小学校課程特別履修（芸術学部芸術教育学科）	6
2. 小二免許特別プログラム	10
第3章 意識調査結果	
1. 芸術学部芸術教育学科受講者アンケート	13
2. 小二免許特別プログラム受講者アンケート	20
3. 小二免許特別プログラム受講修了者ヒアリング	25
第4章 公開研究会	43
資料	72

はじめに

玉川大学教師教育リサーチセンター長
玉川大学教育学部・教職大学院教授
森山賢一

教員の資質能力の向上の在り方については、教師教育とりわけ、教員養成を担う大学においては、長年にわたる最重要課題とされている。特に小中一貫教育制度における教員免許制度の在り方にかかる教員養成の方向性とそこでの教員としての資質能力の保証については今後の課題の一つとして位置づけられる。

近年では、中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会による平成26年11月の「これからの学校教育をになう教員の在り方」においても社会が急激に変化する中、我が国の教育も、知識基盤社会、国際化、人口減少社会といった時代の変化に即した対応が求められており、教育を支える教員についても新たな時代にふさわしい資質能力を備える必要があることが示されている。ここでの教員免許制度においては、学校種を超えた連携や学制改革の検討を踏まえ、次世代の免許制度の在り方についての検討が進められている。特に小中一貫教育制度の円滑な導入および運用に必要な免許制度にあたっては、小学校教員免許状及び中学校教員免許状の併有の在り方が問われている。

本学は、文部科学省が平成26年度に募集した「総合的な教師力向上のための調査研究事業」の実施団体として「総合大学に開設する小学校免許取得コースの多様な試みに対する比較検証」の研究課題のもとで応募し、採択された。本報告書は、本委託事業の報告書である。

第1章においては、本事業の概要として、実施体制、課題認識、現状の取組、調査研究の目的、調査研究の具体的な内容、取り組み方法、調査研究における教育委員会との連携等について述べた。

次に第2章では、小学校教員免許状及び中学校教員免許状の併有を踏まえた今年度の小学校二種免許状取得に関するプログラムの開発について、全学体制における小学校課程特別履修プログラムおよび、通信教育課程を利用した小学校二種免許特別プログラムの開発の二つの概要と実際の運用について詳述した。

第3章においては、上記の2つの開発したプログラムの受講学生に対する意識調査を実施し、その結果を示した。

さらに第4章では、小学校教員免許状及び中学校教員免許状の併有の現状と今後の課題について公開研究会の実施内容について報告を行った。

最後になったが、本委託事業に協力いただいたすべての方々に心より感謝申し上げたい。

第1章 事業の概要

1. テーマ

教育課題に対応するための教員養成カリキュラム開発

調査研究主題

「総合大学に開設する小学校免許取得コースの多様な試みに対する比較検証」

2. 実施体制

職名	氏名	役割分担
教育学部・教職大学院教授、教師 教育リサーチセンター長	森山 賢一	研究総括、教員養成センターと 学部との連携研究
芸術学部長 芸術学部教授	中村 慎一	芸術学部到新設する芸術教育学 科の運営・カリキュラム研究
東京薬科大学生命科学部教授 教師教育リサーチセンター客員教授	田子 健	多様な試みの相互検証と評価
芸術学部 教授	辻 裕久	芸術学部到新設する芸術教育学 科の運営・カリキュラム研究
教育学部准教授	工藤 亘	工学部と通信教育課程との連携 研究
教育学部准教授	太田 拓紀	養成に関わる教育学部と他学部 との連携研究

3. 課題認識

小学校教員の実践的指導力向上のために総合大学が大いに力を発揮すべき時期である。本学では、豊かな教科指導力を持つ小学校教員の養成のために専門学部、教育学部、通信教育課程、教員養成センター（本学での名称・教師教育リサーチセンター）の連携による新たな学科およびコースを開設する。この試みの比較検証を通じて小学校教員免許・中学校教員免許の同時取得カリキュラムの開発に資したい。

4. 現状の取組

平成26年度から芸術学部の中高美術、音楽科の教員の養成に特化した芸術教育学科を開設し、同時に小学校2種免許取得のコースを本学通信教育課程との連携によって特別

に開設する。工学部に数学教員養成プログラム設置し、同通信教育課程の履修による小学校 2 種免許取得を可能とする。これらのカリキュラムについて教師教育リサーチセンターが管理する。新たな養成の枠組みが整い、スタートの段階にある。

5.調査研究の目的

本研究は、総合大学が持つ中学校・高等学校教員の養成基盤を活かした教科指導力の高い小学校教諭免許状の同時取得を可能とするカリキュラムの構成とその効果の検証および改善を目的とする。

本学では、芸術学部芸術教育学科の新設また工学部に数学教員養成プログラムを開設し、音楽科、美術科、数学科の教員養成に特化したカリキュラムによる教育を平成 26 年度から開始する。この学科、コースにおいては、中学校、高等学校教諭免許状を取得可能とするとともに、豊かな教科指導力を持つ小学校教諭の養成のために、教育学部、通信教育課程、教師教育リサーチセンターとの連携協同による小学校教諭免許状の同時取得カリキュラムの運用を行う予定である。芸術教育学科では小学校 2 種免許取得のコースを本学通信教育課程との連携によって特別に開設する。これは夏期休業期間に通信教育課程のスクーリング等を当学科学生に限定して特別に実施するもので、同時取得プログラムとして新たな試みである。また工学部に設置する数学教員養成プログラムでは同通信教育課程の通常の履修による小学校 2 種免許取得を可能とする。2 種類の同時取得の方法について実証効果研究を行うことでカリキュラムの改善を図り、得られた知見から同時取得カリキュラムの一般化に貢献したい。

6.調査研究の具体的な内容・取組方法

1) 同時取得プログラムの開発

- ・芸術学部芸術教育学科 芸術学部において音楽科、美術科の教員養成を行うことを目的とした新設学科である。並行して在学中 3 年間で小学校教諭 2 種免許状の取得を同時に可能とする「小学校課程特別履修」を実施する。本学通信教育課程に特別履修コースを設けて本ニーズに限定したスクーリング等の実施を行う予定である。他大学を含めた通信教育課程を受講する通常のタイプとは異なる当学科学生に特定した通信教育課程との連携による教育を想定しており、豊かな教科指導力を持ち小学校教員としての資質能力も高い学生を育てるためのプログラム開発（第 1 類型と称する）をめざしたい。
- ・工学部 工学部において数学教員養成プログラムを設置し、中高数学科教員養成に特化した専門性の高い教育を行うと同時に、通信教育課程における小学校 2 種免許取得プログラムを在学中に受講を可能とする制度改革を行う。専門学部出身であって小学校免

許を持つ教員の養成に着手するプログラム開発（第2類型と称する）をめざしたい。

2) 同時取得プログラムの実施と評価

芸術学部芸術教育学科および工学部数学教員養成プログラムにおけるプログラムの開発を行いつつ、実施に移るカリキュラムに対して、その実施と評価を行うことで一層の改善に結びつけたい。第1類型と第2類型とでは、同時取得の理念と方法が異なるため、その比較検証が重要な課題となる。カリキュラム評価には受講学生の意見を反映させるため、インタビューおよび調査票による調査を行うこととする。

3) 通信教育課程での教育の検証と改善

この試みは通信教育課程のカリキュラムと指導方法に変化をもたらすため、本プログラムを受けた通信教育課程での教育の検証を行う。効果的で実施可能性の高い同時取得プログラムの開発のためには欠くことができないものである。通信教育課程での学習の検証と改善にも、上記の学生の意見の反映を同様にを行う。

4) 教師教育リサーチセンターにおけるカリキュラム管理方法の開発と検証・改善

大学内における複数学部間の協力が求められる養成プログラムを立ち上げるため、その全体を俯瞰し調整する組織が必要である。教師教育リサーチセンターにおけるカリキュラム管理方法の開発と検証・改善を行う。センター方式によるカリキュラム管理運営については、他大学の事例を参考とするため、名古屋地区大学、九州地区大学に対してカリキュラム管理方法の改善のための意見・情報交換を行う。

5) 教育委員会との連携の具体的方法の開発

新たな試みに対する質的評価と助言について、教育行政機関との連携を密とする。大学所在の町田市教育委員会との連携協力により、複数免許同時取得という新たなカリキュラム運営、特に教育実習、教育実習事前事後指導、教職実践演習のあり方を共同で開発する基盤を形成する。

6) 公開研究会の開催

研究の集約として、小学校教諭と中学校高等学校教諭の免許状同時取得に関してあるべき一般的方向を提案する公開研究会を開催し、研究報告書の刊行と併せて本研究の成果を明らかにしたい。これは同時取得カリキュラムの原則・方法上の改善とその一般化を図る上で重要な契機となる機会と考える。

7.調査研究における教育委員会との連携

連携先教育委員会： 町田市教育委員会

連携内容：

新たな試みに対する質的評価と助言を得るとともに、町田市立学校において教科指導力の高い小学校教員との相互交流を通じて、養成すべき人材像の明確化を図る。

第2章 平成26年度 小学校二種免許状取得に関するプログラム

1. 小学校課程特別履修（芸術学部芸術教育学科）

● 芸術学部概要

「未来の社会を創る芸術力を育成し、芸術によって社会貢献できる人材を養成する。」

芸術学部は新しい時代を生きる若者や子どもたちの未来を見据えて、平成26年4月からマルチメディア環境における表現や芸術の産業化に対応した「メディア・デザイン学科」。既設の教員養成課程を統合して、次世代の芸術による教育を担う人材養成（教員養成）を目的とする「芸術教育学科」。演劇、舞踊、音楽の学修を通してコミュニケーションやコーディネート能力の育成を強化した「パフォーミング・アーツ学科」の3学科で編成され新しいスタートをきっている。

そのうち「芸術教育学科」においては、1年次より学校教育の現場を参観する機会や教職課程学習支援室の活用など、個々の学生が実感を基にして自己の課題を発見し、目標をもって学修に取り組める教育体制が組まれている。また、社会のグローバル化に対応して、「Arts Education」や「Arts Criticism」などの英語で芸術教育を学べる科目群を設置するなど、夢の実現に向かって学修をすすめることができる。また芸術学部設置されているため、演劇、ミュージカル、舞踊、音楽などのパフォーミング・アーツやデザイン、メディアアート、コンピュータグラフィクス、アニメーション、映像、コンピュータ音楽など、常に最新の芸術表現に触れながら芸術教育を学ぶことができる環境が整っている。

平成26年度よりスタートした芸術学部芸術教育学科において小学校教員二種免許状取得プログラムの開発を行い、実施した概要について詳述する。

さきに述べたように、芸術学部芸術教育学科においては、音楽教育のコースでは、中学校教員免許一種音楽、高等学校教員免許一種音楽、美術教育コースにおいては、中学校教員免許一種美術、高等学校教員免許一種美術、および一種工芸が取得可能である。これらの中・高免許に加えて小学校教諭二種免許の取得希望学生が非常に多い。これらの併有免許プログラムの小学校二種免許取得のコースを「小学校課程特別履修」と名付け、芸術教育学科に在籍する学生が、小学校教諭二種免許状取得に必要な科目単位を夏期（夏期セッション）と冬期（冬期セッション）の2つの特別学期開講による対面授業での履修プログラムである。

まずはじめに、小学校課程特別履修の概要を示す。

開講は1年次の特別学期（夏期セッション）から、3年次までの6つの特別学期において小学校教諭二種免許状取得に必要な科目単位のうち、小学校教育実習を除く、必要科目をすべて修得し、4年次に小学校教育実習（事前事後指導を含む）を受講する。

このプログラムは、教育職員免許法施行規則第6条第1項表備考第12により、芸術教育学科で取得する中学校一種教育職員免許状（音楽、美術）および、高等学校一種教育職員免許状（音楽、美術、工芸）の免許状取得に必要な単位を一部流用することで、小学校教諭二種免許状取得のための単位数が軽減されて、4年卒業と同時に小学校教諭二種免許状が取得できるというものである。

したがって、4年間で小学校教諭二種免許状を取得するには、中学校一種教員免許状および、高等学校一種教員免許状（音楽または美術）を取得できることが条件となる。

●履修概要

特別学期（セッション）とは、春学期、秋学期以外に開講する学期であり、8月～9月に行うサマーセッション（SS）と2月～3月に行うウィンターセッション（WS）の2つの期で開講されている。また、特別学期（セッション）では通常期である春、秋学期の開講形態である週1回2コマ100分×15周+定期試験を、学修時間を確保しながら集中して開講するため、1日あたり4コマ200分（途中に自学習として2コマ分の空き時間が入る）×8回（試験を含む）で実施される。特別学期（セッション）開講の形態と4年間の計画は図1の通りである。

1セメ	SS	2セメ	WS	3セメ	SS	4セメ	WS	5セメ	SS	6セメ	WS
-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----

	1時限	2時限	3時限	4時限	5時限	6時限	7時限	8時限
1	1回目				2回目			
2	3回目				4回目			
3	5回目				6回目			
4	7回目				8回目			
5	9回目				10回目			
6	11回目				12回目			
7	13回目				14回目			
8	15回目							
	試験							

図1：特別学期開講イメージ

なお、各特別学期（セッション）での受講科目数ならびに単位数を1年次サマーセッション、1年次ウィンターセッション、2年次サマーセッションは各2科目4単位の開講とし、2年次ウィンターセッションで3科目6単位開講、3年次サマーセッションでは、1科目2単位開講、3年次ウィンターセッションでは3科目6単位開講として計画した。

詳細について、平成 26 年度サマーセッションの実施計画をもとに示すことにする。

実施計画(平成 26 年度サマーセッション)

学生への提示	6 月 30 日(月)	
	I 期	II 期
学生受講申し込み期間	7 月 25 日(金)～29 日(火)	8 月 13 日(水)～15 日(金)
授業日程	8 月 1 日(金)～15 日(金)	8 月 20 日(水)～9 月 10 日(水)
試験日	8 月 18 日(月)	9 月 11 日(木)
成績公開(Web)	9 月 2 日(火)	9 月 18 日(木)
成績認定時期	平成 26 年度 秋学期(第 2 セメスター)末	

平成 26 年度のサマーセッションでは、I、II の 2 期制とし、それぞれの授業日程を組んだ。受講の申し込みについては、本学で活用している UNITAMA での掲示機能により申請することとした。

なお、受講申し込み期間内であれば、申請の取り消しを可能とすることとした。

受講料および納入方法については、1 単位につき 4,000 円（したがって 1 科目 8,000 円）とし、受講申し込み期間中に受講料を納入し、受講手続きを行うこととした。

最終の試験については、セッションの授業終了後に行い、原則として追試験は実施しないこととした。

単位認定については、①セッションで修得した単位については次学期に単位認定とし、次学期の履修上限単位には含まないこと、②卒業要件の単位として位置づけ GPA (Grade Point Average) 計算の対象とすること、③次学期の履修上限単位には含まないが、当該学期の GPA 計算には含まれるので学修継続条件判定（警告）の対象であること、④次学期の途中の段階において退学した場合は、単位の認定は行わないことの 4 項目を設定し、単位認定の明確化を図るよう努めた。

開講科目とその開講時期（セッション）は図 2 の通りとした。

履修科目

科目名	単位	1年		2年		3年		4年	
		SS	WS	SS	WS	SS	WS	春セメ	秋セメ
(教科)国語	2	●							
(教科)算数	2	●							
教育課程編成論(小)	2						●		
国語科指導法	2				●				
算数科指導法	2				●				
理科指導法	2		●						
社会科指導法	2			●					
音楽科指導法	2						●		
図工科指導法	2		●						
道徳教育の理論と方法 (幼・小)	2			●					
特別活動の指導法(幼・小)	2					●			
教育の方法と技術(幼・小)	2				●				
教育相談の方法と技術 (幼・小)	2						●		
教育実習事前指導	3							●	
教育実習									●
単位数合計	29								

図 2

2.小二免許特別プログラム

●小二免許特別プログラムの概要

本学は学士課程において通学課程と通信課程をもつ。この通信課程は教育学部教育学科にのみ開設され、これまで大変多くの教員を輩出した実績をもつ。ここでの教員免許取得の方法の一つとして、教育学部を除く本学通学課程に在学している学生が小学校教諭二種免許状取得を行うことがこれまでも行われてきた。

本稿においては、今年度委託研究事業において、明確に「小二免許特別プログラム」としてプログラム開発に沿って整理し、まとめ、その現状および課題を検討する資料とした。

さきに述べたように「小二免許特別プログラム」は本学教育学部を除いた通学課程（教職課程認定学部学科）に在学して、教職課程の履修をしている学生が、小学校教諭二種免許状取得に必要な科目単位を本学教育学部教育学科・通信教育課程で科目単位を他学部他学科聴講により履修するプログラムである。

このプログラムの実施期間は、平成26年4月～平成28年3月までの2年間とする。したがってこの2年間で所定の科目単位が修得できるように学習計画を立てることが必要である。ただし登録期間は1年間ごとにした。1年経過時に所定の継続履修手続きを行うことになる。実施期間が終了した段階において、各自の単位の修得状況にかかわらず、このプログラムは終了とするものである。

本プログラムによる小学校教諭二種免許状取得についての根拠法令については各学生が所属している学部で修得した単位を一部分流用することを前提としている。正確には、教育職員免許法別表第1（第5条）関係を根拠とし、教育職員免許法施行規則第6条第1項表備考第12により、現在所属する学部で他免許状取得を目的に修得する単位を一部流用することにより、小学校教諭二種免許状取得のための単位数を軽減するという特別な方法によって進めた。なおこの単位の一部流用は、所属する学部で免許状が取得できた場合のみに認められる。したがって所属する学部において免許状が取得できなかった場合においてはこのプログラムのすべての科目を修得したとしても、小学校教諭二種免許状は取得できないこととなる。

次に履修方法について説明することにする。ここでの履修方法いわゆる学習方法の特徴は、テキスト履修とスクーリング授業の2つから成り立っていることである。

テキスト履修はテキスト自学自習してレポート作成、提出ののち、科目試験を受験して単位を修得する学習方法である。レポートと科目試験の両方に合格すると単位が修得される。

レポートは1単位について1通の提出が必要であり、このプログラムにおいては、2単位科目が開講されているので、2通のレポートを提出することによって科目試験が受験可能となるのである。

スクーリング（対面式）履修については、一定期間集中的に授業を受講して単位を修得

する学習方法であり最終日（最終時間帯）に試験を受験し、合格することにより単位が修得できるものである。単位修得の要件は以下のように定めている。

- ・出席数（出席時間数）が充足していること
- ・受講に際して課題を提示するがその課題（スクーリングレポート）が期限までに提出されていること
- ・最終評価（期末試験等）が合格基準に達していること

スクーリング（対面式）履修登録科目について1年目は3科目6単位を原則として、夏期スクーリングで受講し、春期・冬期での受講も可能とする。

さらに履修にかかわって重要なものとして教育実習があげられる。本来、小学校教諭二種免許状の取得にあたっては、5単位の教育実習単位が必要であるが、教育職員免許法施行規則第6条第1項表備考第12を根拠にして、所属する学部において、免許状を取得するにあたって行う教育実習の単位を一部流用し、3単位を修得する形をとっている。

その3単位の内訳については、事前・事後指導1単位と実際の現場での実習2単位（2週間）を原則としている。ただし、教育実習校や受入れ地域によっては単位の流用ができない場合もありうる。その場合においては、事前・事後指導1単位と現場での実習4単位（4週間）の教育実習が必要となる。

教育実習を実施するにあたっての受講資格を明確に定めている。この受講資格は、一定の学習の上で専門的な知識を身に付けたことを条件として教育実習の受講を許可するものである。

受講資格要件は、以下の通りである。

- ・教育実習事前指導（講義）の受講
- ・基礎単位の修得

教育実習受講1ヶ月前までに1年目の履修登録科目である教科に関する科目1科目2単位、教職に関する科目7科目14単位のすべてを修得していること。

本プログラムにおいて履修した科目については、セメスター上限単位には含まれないが、修得した単位は、卒業単位に算入し、GPA計算の対象とする。

本プログラムの免許取得にかかわる全体の教育課程は次の表の通りである。

小二免許特別プログラム教育課程

免許法施行規則に定める科目名		単位	中・高免許取得のための学習により活用できる単位	通信教育部における履修科目	単位	補足説明		
教科に関する科目	国語(書写を含む.) 社会 算数 理科 生活 音楽 図画工作 家庭 体育	4	-	国語(書写を含む。)(2) 社会(2) 算数(2) 理科(2) 生活(2) 音楽(2) 図画工作(2) 家庭(2) 体育(2)	4	○2科目4単位を選択し修得する。		
	教科に関する科目計		4	0		4		
	第2欄	教職の意義等に関する科目	教職の意義及び教員の役割 教員の職務内容(研修、服務及び身分保障等を含む。) 進路選択に資する各種の機会の提供等	2	2		○施行規則第6条表備考12により他免許状取得のため修得した科目単位をもってこれに充てる。	
			教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想 幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程(障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。) 教育に関する社会的、制度的又は経営的事項	4	4		○施行規則第6条表備考12により他免許状取得のため修得した科目単位をもってこれに充てる。	
	第4欄	教育課程及び指導法に関する科目	教育課程の意義及び編成の方法		-	教育課程編成論(2)	2	
			各教科の指導法 (音楽、図工、体育のうち、2教科以上を含み、6教科12単位が必要)	14	-	国語科指導法(2) 社会科指導法(2) 算数科指導法(2) 理科指導法(2) 生活科指導法(2) 音楽科指導法(2) 図工科指導法(2) 家庭科指導法(2) 体育科指導法(2)	12	○6科目12単位を選択し修得する。 ※音楽、図工、体育を含む。
			道徳の指導法		-	道徳教育の理論と方法(2)	2	
特別活動の指導法				-	特別活動の指導法(2)	2		
教育の方法及び技術(情報機器及び教材の活用を含む。)				-	教育の方法と技術(2)	2		
第5欄	生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	生徒指導の理論及び方法	4	2	児童理解と教育相談(2)	2	○施行規則第6条表備考12により他免許状取得のため修得した科目単位を2単位充て、2単位を修得する。	
		教育相談(カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。)の理論及び方法						
		進路指導の理論及び方法						
第6欄	教育実習	5	2	教育実習	3	○施行規則第6条表備考12により他免許状取得のため修得した科目単位を2単位充て、3単位修得することを原則とする。		
第6欄	教職実践演習	2	2	教職実践演習(教論)	-	○施行規則第6条表備考12により他免許状取得のため修得した科目単位をもってこれに充てる。		
教職に関する科目計		31	12			25		
教科又は教職に関する科目		2	-			-	○2単位については「教職に関する科目」の余剰分を充てる。	
教科又は教職に関する科目計		2	0			0		
免許法施行規則第66条の6に定める科目名		日本国憲法	2	2			○所属学部で修得した科目単位をもってこれに充たさせ、通信教育部ではいずれの科目も修得の必要はない。	
		体育	2	2				
		外国語コミュニケーション	2	2				
		情報機器の操作	2	2				

第3章 意識調査結果

1.芸術学部芸術教育学科受講者アンケート

芸術学部小学校課程特別履修に関する意識調査

玉川大学教師教育リサーチセンター

芸術学部では、本年度芸術教育学科を開設し芸術教育に対する専門教育を行うとともに、中学校・高等学校（音楽・美術・工芸）免許に加え、小学校教諭2種免許を取得することを可能とする「小学校課程特別履修コース」を開設しました。このコースを履修する皆さんの意見を伺いながら、今後のコース運営をよりよくしていきたいと思っておりますので、以下の設問に答えてください。よろしくお願いいたします。

* 下記質問に対して、【】内の該当する回答に○、また記述にて回答をお願いします。

1. あなたは、教員免許状を取得しますか？（中学校・高等学校の免許含む）

【はい・いいえ】

* 「はい」を選んだ方は続けて2から回答してください。

「いいえ」を選んだ方は※の1. 2のみ回答して本アンケートを終了してください。

2. あなたは小学校課程特別履修コースを履修していますか？ 【はい・いいえ】

* 「はい」を選んだ方は続けて3から回答してください。「いいえ」を選んだ方は9を回答してください。

3. あなたは入学前にこのコースのことを知っていましたか？

【知っていた・知らなかった】

4. 【知っていた方のみ】そのことは本学科を選択する上で、どの程度の重要性がありましたか？

【選択の第一の理由が小学校免許取得である・選択理由のひとつである】

5. 履修登録をした時点と現在を比較して、小学校免許取得への意欲はどのような状態にありますか？

【登録時点のほうが意欲は高かった・変化はない・現在のほうが意欲は高い】

6. その理由は何ですか。自由に記してください。

7. 履修登録をした時点と現在を比較して、小学校免許取得までの具体的な履修内容・方法への理解はどのように変化しましたか？

【現在のほうが履修内容・方法の理解は深まった・まだあまり変化はない】

8. 夏休みや冬休みなど休業期間に必要な科目を履修するシステムについて、あなたの見方を選んでください。

【通常の学期には履修出来ないなのでこの方法が適当である・むしろ土曜日や日曜日の履修を可能として欲しい・特に意見はない】

9. 小学校課程特別履修コースを履修しなかった(または、途中でやめた)理由についてあなたのご意見を自由に記載してください。

※ 最後に下記項目について教えてください。回答のすべては統計的に処理し、回答の内容が他に知られたりすることはありません。

1. 性別【男・女】

2. 教員を第一に希望する学校種は【小学校・中学校・高等学校】

3. 取得予定免許は（すべてに○）

【小学校、中学校（美術・音楽）、高等学校（美術・音楽・工芸）】

以上です、ありがとうございました。

芸術学部小学校課程特別履修に関する意識調査【記述①】

NO	Q6その理由はなんですか？(自由記述)	Q9小学校課程特別履修コースを履修しなかった(または途中でやめた)理由についてあなたのご意見を自由に記載してください
1	2: 小学校免許は中学・高校のためにとっているからです。	
2	1: 教員になるという意識が低くなったため。ほかに興味をもつ職業ができたため	第一に専門分野を学びたかったため
3	3: サマーセッションの単位はフル単位だから	
4	2: 先生になりたいから	
5	3: 授業を受けたから	
6	2: 小学校免許取得するという目標は履修登録した時と変わらないため	
7		
8		
9		
10	2: 小学校免許を取得すると決めていたから	
11	1: 単位が取れるか分からなかったから	自分にはあまり必要がないと思ったから。
12	1: 休みにやる意味がわからない	あんなに一気に休みにやる意味がわからない。
13		小学校教諭2種免許をとるつもりがなかったから
14	1: もう少し専門的に音楽の勉強がしたいから。	
15		
16	2: 小学校免許取得のため、夏、春の長期休暇がなくなってしまうことは大変なことだが、小学校免許を取得したいという意味は、以前と変わら	
17	1: コースの日程の組み方に不満があるから	
18	1: 参観実習を通して、小学校よりも中・高の方に興味関心が向いたため。	
19	2: 特にありません	
20	2: 思っていた通り二種免許だから	
21	3: 小学校教師にも魅力を感じたから	
22	3: 実際に小学校の学童の現場で先生として活動して様々な体験をしたからです。	
23	1: 夏休みと冬休みがないと思っていなかったから。	
24		
25		
26		
27	1: 中学校教諭になりたいため、小学校免許は取得したい。だが、自分の力量的に難しいかと考えたから。	
28	3: 小学校教員をもとから目指していたから。	
29	2: 中学の先生になる場合、小学校の免許が必要と先生に聞いたから。	
30	2: 特になし	
31	2: 特にないです	
32	3: 小さな子供が苦手だと思っていたが、参観実習で中学校に行き、小学校、中学校程度の子どもと接することも楽しそうだったから。	まず長期休みを利用しなければならないことがおかしいと思う。通常授業の中で選択できるようすべき。4年間の全ての長期休みが無いとなると、運転免許
33		
34		中高課程を履修することだけで、精一杯なので、履修しませんでした。
35		小学校の教師は自分にむいてないと考えたから。
36		高等学校の教師になりたいから。夏休み期間はアルバイトをしたい(しなければ学費が払えない)
37		小学校の教科(全教科)を教えられる自信がなかった。長期やすみを利用して様々な体験をしたかった
38		
39		高等学校の免許を第一に考えていたから
40		
41		中高の教員になりたかったため夏休みなど自分で学童保育などしたかった
42	6: 小学校教諭の方が倍率が高いこと。小2免許の学習をして楽しかったから。	
43	2: 想像していたものと少し違っていました。問題はあります。	
44		
45	2: 特になし	
46		
47		就職に有利だということは知っていたが、小学生よりも中高生のストレートに感情を伝えてくえうことが、自分に合っていると思ったから。

芸術学部小学校課程特別履修に関する意識調査【記述②】

NO	Q6その理由は何ですか？(自由記述)	Q9小学校課程特別履修コースを履修しなかった(または途中でやめた)理由についてあなたのご意見を自由に記載してください
1	2: 小学校免許は中学・高校のためにとっているからです。	
48		サマーセッションで受講した授業の単位1つ落としてしまい、高等教諭免許をメインに取りたいと考えていたので小学校教諭免許は取らず実技免を磨いていこうと決めた。
49	2: 小学校免許は元から取得したいと思っていたので変化はない。	
50		高校の教師になりたかったため
51	2: なし	小学生に教えるのは自分に合っていないと感じたため
52		小学校の教員免許は必要では無かったため。
53		小学校教員を目指しておらず、免許を取得する余裕がないと考えたから
54		必要ではないと思ったから
55	3: サマーセッションを受講したときに、小学校の様子、授業の仕方などうけて最初の頃より、小学校に興味深まり、取得したいと思いました。改めて小学校の教師についてかんがえてみる	
56	2: 現時点での希望が中学校の音楽教員なのですが、小学校からの連携はとてほしいことだと思っています。その理由と第二希望が小学校だからです。	
57	2: やはり音楽の実技で食べていく気持ちに変わらないから。	特に興味はわかかなかった
58	1: 夏に国語と算数について学び小学校での基礎的な内容がしっかりしていることで、その後の中学校や高校の勉強にもつながると分かった。したがって、中学校志望ではあるが、小中連携の所も増えているように中学校の教員になる上でも、小学校の学習内容を知っておくことが必要だと感じたためである。	

2.小2免許特別プログラム受講者アンケート

小学校2種免許特別プログラム履修に関する意識調査

玉川大学教師教育リサーチセンター

文部科学省委託事業により、アンケートにご協力ください。

*下記質問に対して、【】内の該当する回答に○、また記述にて回答をお願いします。

1. あなたは入学前にこのプログラムのことを知っていましたか？

【知っていた・知らなかった】

2. 【知っていた方のみ】このことは本学入学を選択する上で、どの程度の重要性がありましたか？

【中高免許と同時に小2免許取得できることが一番重要・単に選択理由のひとつ】

3. 入学の際、小学校免許取得可能な教育学部へ入学しなかった理由を選択してください。

- 【1. 現在の学部で取得できる免許種を取得した上で、小2免許を取得しなかった。
- 2. 現在の学部だけにこだわりはなかったが、教育学部には取得したい免許種がなかった。
- 3. 本当は教育学部へ入学したかったが、入学できなかった。
- 4. その他(理由:)】

【1. を選択した方のみ】なぜ、そのように思われたか理由を自由に記してください。】

4. 受講開始した時点と現在を比較して、小学校免許取得への意欲はどのような状態にありますか？

【受講開始時のほうが意欲は高かった・変化はない・現在のほうが意欲は高い】

5. 4の回答理由は何ですか。自由に記してください。

6. 受講開始時と現在を比較して、小学校免許取得までの具体的な履修内容・方法への理解はどのように変化しましたか？

【現在のほうが履修内容,方法の理解は深まった・まだあまり変化はない】

7. 小2免プログラムの履修方法について、以下のどの履修形式が望ましいですか？

【1. 全ての単位を対面式（スクーリング形式）で取得する。2. 全ての単位をレポート・試験（テキスト履修）で取得する。3. スクーリング履修とテキスト履修の両方で取得する。

4. その他（）】

8. 本プログラムにより通学課程の授業と、通信教育課程の授業・レポート作成・試験による単位取得方法の両方を経験して、どのような力がついたと感じますか？

※ 最後に下記項目について教えてください。回答のすべては統計的に処理し、回答の内容が他に知られたりすることはありません。

1. 所属学部学科【学部学科】

2. 性別【男・女】

3. 教員を第一に希望する学校種は【小学校・中学校・高等学校】

以上です、ありがとうございました。

小学校2種免許特別プログラム(数学教員養成プログラム含む)履修に関する意識調査 集計表

No	1.あなたは入学前にこのプログラムのことを知っていましたか？		2.【知っている方のみ】このことを選ぶうえで、どの程度重要になりましたか？		3.入学の際、小学校免許取得可能な教育学部へ入学しなかった理由を教えてください		4.受講開始した時点と現在を比較して、小学校免許取得への意識はどのように変化しましたか？		6.受講開始と現在を比較して、小学校免許取得までの具体的な履修内容・方法への理解はどのよう変化したか？		7.小2免許プログラムの履修方法について、以下のどの履修形式が望ましいですか？					1.所属学部					2.性別		3.第一希望学校種							
	知っていた	知らなかった	1 非常に重要	2 重要	① 現在のほうが意識が高い	② 変化はない	③ 受講開始時のほうが意識は高かった	④ その他	① 全ての単位を対面式(スクリーニング形式)	② 全ての単位をレポート・試験(テキスト履修)で取得	③ スクリーニング履修とテキスト履修の両方で取得する	④ その他	人間文学部	比較文学部	工学部	マネジメントサイエンス部	リベラルアーツ部	リベラルアーツ部	芸術学部ヒジュアルアーツ	芸術学部パフォーマンスアーツ	男	女	小学校	中学校	高等学校	小学校併属	中学校併属	高等学校併属	未回答	
1	1	1	1	1	7	8	4	15	4	5	0	14	0	3	5	2	7	7	1	1	7	12	10	4	4	1	1	1	1	
2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
12	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
13	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
14	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
15	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
16	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
17	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
18	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
19	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
計	14	5	11	3	7	1	1	15	4	5	0	14	0	3	5	2	7	7	1	1	7	12	10	4	4	1	1	1	1	

小学校2種免許特別プログラム(数学教員養成プログラム含む)履修に関する意識調査 集計表【記述】A

	3.入学の際、小学校免許取得可能な教育学部へ入学しなかった理由を選択してください	4.受講開始した時点と現在を比較して、小学校免許取得への意欲はどのように変化しましたか？	5.4の回答理由は何ですか？	
NO	【①を選択した方のみ】なぜそのように思われたか理由を自由に記してください	欲現 は在 高の いほ うが 意	変 化 は な い	か う 受 つ が 講 意 開 始 時 高 の ほ
1		1		履修することで内容が具現化したから
2	元々中高の数学の教員をめざして小2免プログラムは卒業と同時に小中高の免許が取得できるというのがとても魅力的でした			1 夏のスクーリング、レポート科目試験も含め通信の勉強と普通の大学での勉強の両立がなかなか難しい為
3				1 想像以上に中高と並行して免許を取得することが忙しく大変。
4			1	元から努力して取得したいと思っていたのでその気持ちは変化はない。
5	英語が重視される世の中になってきているので、英語の免許をもっていることで有利になると考えたから		1	特に変化はない
6	・自分の視野を広げたかったから ・最近発表された答申のように小学校の英語の専科の教師を置く働きになる予測をしていたため、その際に小学校英語専科の教師を養成するコースを大学に設置するまでどこから人材をとるか考えたとき、小学校と中高英語の免許を持っている人から登用するだろうと考えていたため			1 玉川大学は他大学と比較して課題が多い為、小学校免許取得との両立が難しく、内容を学ぶより「こなす」イメージが強くなってしまったため
7	英語の免許を取ったのちに、小学校英語教育にもいかせると考えたため	1		1 学業とへいこうして、小2免も行うことができているため
8			1	1 中学校で採用試験を受けようと思ったが、それでも小学校の免許はしっかり取得しようと思っているから。
9				1 計画的に行う厳しさや、スクーリングを受講したくても、スクーリングの費用があまりにも高すぎるため、学生にとっては痛手である。学習したくても、現実を見てしまうと意欲がだんだん低くなっていった。
10	私は、現在の専攻科目である中学校、高校の英語の免許をまず取得したいと考えてこの学部に入りました。自分自身の視野を広げたい、また今後の外国語教育のさらなる広がりを考慮し、小2免許の取得を目指しました。	1		1 月に一度レポート提出・試験ということで、仲間と協力しあいながら、行っているから
11				1 レポート期限やテストなど定期的に決まっているので、それに向けていわば機械的にやっているという表現が正しいのかもれません。しかし、他の課題や自分の学習に追われる中でも小2免の勉強ができているのは、常に小学校教師になった自分の姿を想像し、意欲を維持できているためだと思っています。
12			1	1 昔も今も教職に対する熱意は変わらないから
13		1		1 小学校へのボランティアやJ-shineの実習で小学生とふれ合う機会が増え、本気で小学校の先生になりたいという気持ちが高まってきたから。
14	一番学びたい、研究したいのは芸術教育であり、どのように活用可能であるか、そもそも基本と成る児童教育の在り方とは何かを同時に学びたかったから。			1 教育実習行ったら変わるかも。具体的に想像する余裕がない。
15		1		1 小学校の教員になることを第一に考え始めたため。
16	教員としての幅を広げたかった。			1 小学校の教師になることを第一希望にしてはいないが今後役に立つ可能性もあるのでとる意志はあるから。
17	英語の免許はもとからだろうと思っていた。入学後にこのプログラムを知り、これからは小学校でも英語が必要となってくることから、持っていたら有利であると思った。	1		1 もとは中学教師が夢であったが、夏期スクーリングで各先生方の講義を受けているうちに、小学校の教師も魅力的だと思うようになった。
18		1		1 思っていたよりもレポートなど難しかったため意欲的にやっていたいかならないといけないと感じたため。
19		1		

小学校2種免許特別プログラム(数学教員養成プログラム含む)履修に関する意識調査 集計表【記述】B

	7.小2免プログラムの履修方法について、以下のどの履修形式が望ましいですか？	8.本プログラムにより通学課程の授業と、通信教育課程の授業・レポート作成・試験による単位取得方法の両方を体験して、そのような力がついたと感じますか？
NO	その理由	
1	テキストのみでは理解できない点が多いから	時間を効率的に使えるような計画を立てる力が身についた
2	夏季のスクーリングに参加し、とても勉強になりました。テキスト履修だけではわからないことが多かったため	どちらの授業でも同じことを勉強したことがあり前に勉強したときはあまり分からなかったことが理解できたり、繰り返し学習できるような気がします。
3	単位分全てをスクーリングで受講することは難しいが、より多くスクーリングで受講した方が、授業で理解が深まり単位の取得もしやすくなると思うから	普段は英語教師になるための授業を受けていて、小学校で全科をどう教えるのか全くわからなかったが、実際に授業を受けてイメージが湧いた。それぞれの指導案の書く力がついてきた。
4	スクーリングで他の人の意見などを聞くことも重要と考えるから	レポート力、コミュニケーション能力、試験慣れ
5	現状に満足している	自分を追い詰める力
6	本当ならば対面式で取得したいが、そこまで時間が取れないため。	通学課程では得られなかった自己啓発力
7		自分で調べる力
8	レポート学習も必要だが、やはり対面式のスクーリングの方が学びやすいから。	文章を書く力、初対面の人も協力して話し合う力は特についたと思う。
9	履修登録時に、スクーリングは単位数が6単位、他はテキスト履修という制限がかけられていたため。	すくーりんぐでの授業は興味深く感じたが、レポート作成に関しては、あまり力が付いたとは感じられない。
10	それぞれの良さがあるから	まず、読解力そして文章力がついたとともに、一般教養もついたと思います。
11	現在の履修スタイルに不満はないから	自分を追い込み、ひとつの目標に向かってがんばっていく力。
12	どちらも良さがあるから	内容については知らないことばかりだったため、科目についての深い知識を得ることができた。
13	対面式のみでは大学での勉強との両立が厳しい。しかし、テキスト履修のみでは、理解が深まらないと思うため。	計画的にレポート作成や試験勉強をする力がついたと感じた。
14	本で学ぶことは通信でなくても出来る。教員がどのように私たちに教えるのか、その授業法までもが学びたい内容であるから。短期集中型で修得できる。	時間が無い。自分の余裕の無さを理解する力がついた。
15	学部内の勉強、教職科目も重要だと考えているため、スクーリングに通う時間が削減できると思ったから。	時間を効率良く使うようになった。
16	スクーリング授業を受けた方がわかりやすい授業もあるから。また、テキスト履修は通信でとるメリットの一つと考えるから。	計画性をもって取り組む力。
17	テキストだけではやはり内容理解が深まらない。時間にしばられてしまうという欠点はあるが、そのほうが力がつくと思う。	計画的行動力、集中力
18	スクーリングは、よく理解ができ、とても役に立つとおもう。レポートは調べてまとめる力がついたため役に立つと思うため。	スクーリングでは、コミュニケーション能力がついたと思う。また、良い授業とは、、、ということを考える良い時間だった。レポートは、必要なことを調べてまとめる力がついたと思います。どちらも、教職に対する理解が深まった。
19	自分の生活スタイルに合わせた学習をすることができる	課題文から何を求められているのかを読み取る力

3.小二免許特別プログラム受講者修了者ヒアリング

小二免許特別プログラム 受講修了者（採用試験合格者）ヒアリング

【出席者】

- ・森山賢一（玉川大学教師教育リサーチセンター長：委託事業実施責任者）
- ・田子 健（東京薬科大学教授、玉川大学客員教授：委託事業実施分担者）

- ・芸術学部パフォーミング・アーツ学科（音楽）小林 愛音（川崎市小学校）合格
- ・リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科（英語）松永 尚子（東京都小学校）合格
- ・リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科（国語）永井 真（千葉県小学校）合格
- ・工学部マネジメントサイエンス学科 小嶋 崇之（栃木県：中学（数学）合格）小学校併願

森山：今日、皆さんにお集まりいただいたのは玉川大学が今年度（平成26年度）、文部科学省から委託事業「総合的な教師力向上のための調査研究事業」に採択を受け、その研究を進めるにあたりご協力をいただきたく、お集まり頂きました。本事業は代表を学長小原先生、教師教育リサーチセンターで研究の実施を責任もってやることになっています。具体的な内容として、皆様に本日ヒアリングさせて頂くことは、特にダブル免許プログラム（小学校2種免許取得特別プログラム）のことで。

皆さんは、それぞれの学部にも所属し中等教育教員養成のなかで中高の免許を取得の上で、小学校の教員免許をあわせて取得されるということでの、いわゆる複数免許のプログラムを受講されました。そういう意味での調査をさせていただきたいということでお集まりいただきました。今日の流れとしては、この研究の責任者である二人（田子、森山）で進めさせていただきます。二人からいろいろと質問させていただきたいと思います。まずは最初のあたりのところは田子先生に質問させていただきたいと思います。自由にざっくばらんに思ったことを言っていていいです。大学としては、皆さんの後輩の指導にも役立てたいと思います。正直言いますと私もみなさんと考えは同じで、玉川大学のいろんな学部を出られた方が小学校の免許をとっていただいて、そして、中学校に勤めるもよし、小学校で勤めるもよいと思っています。では、田子先生お願いいたします。

田子：今日は本当にありがとうございます。私はこの玉川大学の芸術学部の授業を担当していて、客員教授で玉川大学に来ています。小林さんには前にも授業でお会いして、見事合格されたということでよかったですね。先生というのは、本当に自分から教えるっていう気持ちがないと一日も務まらないという仕事なのです。そうした気持ちを最初からね、持って大学に入って来てくださっていると思うのですけれど



も、大学に入学して、どんなことを学んでいくかっていうことを具体的に分かって、そのうえでもう一つ、先生としての仕事に結びついていくことを大学で皆さんと深めて行きたいと思っているのですが、うまくいっていることばかりではありません。皆さんのように合格をして、これから希望の進路を選んでいる人はいいのですけれど、途中で、カリキュラムが難しいとか、あるいは、先生という仕事になかなか興味を持てなくなってしまったとか、そういうこともあります。せっかく大学に入ってきた皆さんは、いい進路でね、先生になってもらいたい。これから大学の教育をよく変えていきたいという気持ちもあるので、今日は、我々の質問に答えてもらうだけではなくて、我々に質問してもらって、こういうところは一体どうだったのかと 4 年間で振り返って追求してもらっても結構ですので、本当に自由に話し合いができればと思います。それで、まず最初に、今日来ていただいた方の所属している学部と学科、お名前、それから何の教科を教えるかどんな進路先かということをお話しいたきたいのですが、誰からにしましょうかね。

じゃあ、小林さんお願いします。

小林：はい、芸術学部パフォーマンス・アート学科の小林愛音と申します。

私は小学校 2 種と、中高（音楽）の免許をとりました。受けたのが川崎市の小学校で、川崎市の教員に春からなります。よろしくお願いいたします。

全員：お願いします。

田子：川崎市の小学校に決まりましたか？

小林：そうです。

松永：リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科の松永尚子といます。私は、小 2 免許特別プログラムで小学校の 2 種免許と、中高（英語）の免許、あと学部の小学校英語指導者資格（J* Shine）プログラムで J-Shine という小学校英語指導者資格（民間資格）も在学中に取得しました。4 月からは東京都の小学校で採用されることになったので東京都の小学校で働きます。よろしくお願いいたします。

永井：リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科の永井真です。中高（国語）の免許と小学校の 2 種免許を取得しました。千葉県に採用が決まりました。まだ、詳しい行先は決まっていますが千葉県で働きます。よろしくお願いいたします。



小嶋：工学部マネジメントサイエンス学科の小嶋崇之です。中高（数学）と小 2 免をとっていて、採用試験は栃木県の中学校数学と小学校併願で受けまして、合格は中学校の数学ですけど、配属は小学校になる可能性もあります。よろしくお願いいたします。

全員：よろしくお願いいたします。

田子：すごいですね。関東全域に進路が広がっていますね。

森山：神奈川、東京、千葉、栃木。

田子：皆さんがその県を受験しようとした理由はどんな理由ですか？自分の出身地なのか、それとも何か別の理由があるのでしょうか？

小林：自分は出身が長野県なのですが長野県の採用試験の傾向として信州大学の教育学部が優先になってしまう傾向があるという噂を聞きました。また、自分は地元を離れるために上京してきたこともあったため。現在私が一人暮らしをしている川崎市がとても住みやすく素敵な街だったので、川崎市で骨をうずめようと思い川崎市を受験しました。

田子：川崎の採用試験というのは、政令指定都市として独立してやっているんですけど、何か試験の準備で心掛けたことはありますか？

小林：心掛けたことについては、まず、教職サポートルームで川崎市担当の指導教員の先生が、政令指定都市である川崎市で教員になるために必要なことについて細かい部分まで丁寧にご指導くださったので、それを忠実にこなせるよう心掛けました。

また、教育学部で同じ川崎市の教員を目指している仲間がいたので、一緒に互いの弱点を指摘し合ったり、どうしたら更によくするか考えたりと、仲間と共に同じ目標に向かって取り組むことが出来たので、一人で苦労したというよりも仲間と共に戦えたので心強かったです。

田子：みんなで勉強していった方向が正しかったということかな。いい方法を選びましたね。良かったですね。では、松永さんどうですか？（東京は）出身地ですか？

松永：そうです。東京は出身地です。他の所も練習で受けようと思ったんですけど、やはり自分の出身地が東京ということと、東京都は教育の最先端というか、何でも東京から日本へ発信されると感じていて、どうせ働くなら一番すごいところで、一番凄いついていうとあれなんですけど、その教育に力を入れていて、いろんなことに挑戦して取り組んでいる自治体で自分のことを高めていきたいなあと、やっぱり東京都だなと思って、私は東京都を受けました。

田子：東京都って、見ていてどんなところがすごいと思います？

松永：東京都はやはり子どもの数が多いのに、対応しなければいけない問題がたくさん出てきて、たとえば、いじめの問題だったり、自殺の問題だったり、そういったものもあるので、それに対応していくために、何をすればいいのかというのを先生たちが熱心に考えているな、っていうのを身近で感じました。あと私は英語の免許をとっているのですが、英語に関してもオリンピックがあるということですのでごく英語に力を入れている学校もあって、区によって本当に様々なのですが、例えば品川区でやったことをこっちの区でやってみようだとか、一つのところから発信して、いろいろな取り組みをしているので、そういうところがすごいなあと思いました。

田子：そうですね。なるほど。永井さん千葉県はどうですか？

永井：はい。自分が（千葉県）出身地だったのと、今ボランティアでお世話になっている学校も自分の母校だったので、やっぱり、凄く親近感があるので地元で働きたいなあと思って千葉県を選びました。



田子：どこか他の県とか地域とかに関心を持ったことはありますか？

永井：まったく考えてなくて千葉県だけです。

田子：はい、わかりました。

小嶋：はい。僕も永井さんと同じで地元で働きたいというのが一番強かったです。

田子：やっぱり先生を目指すということで自分の生まれ育った地域で子どもをこれから教育して育てていきたいという気持ちは、大事な気持ちだと思うのです。その気持ちを生かしていくために大学での学びというのは、幅の広い基本の本当の学問から自分が教員として何をどう教えるかということまで繋がりがあがる。これを大学の4年間学んでこられたと思うのですが、同時にみんな4人とも小2免の特別プログラムを併せて履修していらっしゃる。教育学部以外の学部で教職の課程をとったのだけでも、専門の学部で学んでいて、隣にいる人は必ずしも教職を目指していないという環境の中で4年間継続してくるということは立派だと思うし、なかなか大変なことだったのではないかなと思うのですが、大学に入って来た時の教職をとりたいたいという気持ちを振り返ってみて、それから大学で学んでいく中で、どう深化し成長したのだろうかということをお今日は聞いてみたいと思いますが、まずは、大学に入る時に、先生というものに対して

どんな憧れというか、どんな先生になりたいと思っていましたか？

小林：私は高校を卒業したあとに、私立型の受験型で数学とか理系を全部捨ててやったのですけど、ふと自分のことを思っ、先生になりたいのに何で理系から逃げてやっているのだろうと思っ、一回浪人したのですね。浪人している中で、自分ができなかったことができるようになって凄く楽しいな。と思っながらここに入学して、ここに入学したのは、小学校の免許と全部とれるということで入学した時に、憧れの先生というか、こう自分は今まで逃げてきてから、逃げてきて、（それを克服して）できるようになったから、それを伝えたいな（子供たちに）という気持ちでやってきたのですけども、大学に入ってから、まだ漠然とこういう先生になりたいというのは無くて、とりあえず自分の夢に向かっていこうという考えでした。

田子：芸術学部で教職課程とっていた人は結構いたのですけれど、他の進路に進んでみたいと思っことはありましたか？

小林：ないですね。でも、教職の無い人たちが、いろんな授業をして、いろんなことを学んでいて、そういうのは行きたいけどダメなんだなと思ったりとかしたこともありました。

田子：自分で考えてみて教育を専門で学ぶ学部で学ぶのと、芸術学部で学ぶのと教職につくことでどこか違いというのはあると思っますか？

小林：違いは専門性だと思っます。大学入ってから楽器をチェンジして、初心者から専門として入ったのですね。最初はやめろって止められたのですが、どうしても新しいことが知りたくて新しい分野に足を踏み入れてやってきたわけですが、打楽器を専門にやってきて、今までは、トランペットだったりピアノや歌を専門としてやってきたのですが、新しいことに挑戦したくて、打楽器を始めたのですが、それと並行して教職を学ぶことで、専門性というか、自分だったら子どもに、こう教える（教えたい）なっという視点がある、のだと思っます。

田子：新しい楽器を選んで、初歩から学ぶと、これが、子供が学ぶプロセスとよく似ているので指導の方法とかその考えを考えるきっかけとかになると、そういうことですね。そこは、やっぱり、専門の学部で学ぶ一つの大きな成果だね。

小林：そうですね。

田子：松永さんは、リベラルアーツで学んで教員を目指したのですが、最初どうでしたか、リベラルアーツって？かなり幅広くあるでしょ？どうでした？

松永：わたしは、小学校の時から先生になりたいと思っていて、教育学部を受験して落ちてしまって、玉川大学が第一志望で、何故かという二種免許のプログラムがあって、どの学部に入っても小学校の免許がとれるということで、いろんな学部を受けたのですが、リベラルアーツ学部に入って、一年目は教職の授業というのがあまりなくて、数学の授業をとったりとか、宇宙科学とか社会学とか国語とか英語とかいろいろな授業をとって行って、最初は、もっと授業がうまくなるような授業を受けたいって思っていて、その指導法みたいなものを1年生の時から受けたいなと思っていたのですが、今となって考えてみると1年生の時にいろいろな友達が出てきて、例えば、永井君みたいに国語を専門に先生になるとか、あと音楽をやっている子もいたりとか、オペラやっている子とか、あとは脳科学を研究している子とか、ほんとにいろんな子がいて、4年生になっても、まだその子たちとは友達で、今になって考えてみると、1年生の時にそうやって（いろいろな授業で）であった人達と、こうやって、成長して4年生になって接していく中で、その子たちの夢とかを聞いたりすることで、自分の人生だけではなく他の人の人生も知れたり、専門分野のはなしを聞けたりして、教育学部に入ったことがないのでわからないのですが、教育学部は、先生らしい先生は育つかと思うのですが、こうやって、私たちの学部は特にそうなんですけども、いろんなことを知っている先生になれる。例えば、芸術学部だったら、音楽のことをこんなに知っている小学校の先生はあんまりいないと思うのですよ。その自分の学部で中学のことを学んだりとか、友達がいろんなことをしてる。先生だけではなくて、リベラルアーツ学部なんかは、いろんな企業とか、なんかいろいろなところへ就職している子が多くて、そういう子たちから話を聞いたりすることで、その視野が広がる。だから、その小学校の先生になるためのこと以外のことも、いろんなことが知れて、それはよかったと今になっては思います。

田子：小学生はやっぱりいろんな将来に対する夢や考えをちょっとずつ持ち始める時だから、そういういろんな進路を選ぼうとする友達と接してきたということは、これからの時代を生きる子供たちに夢を与える視野の広さを得たということはいいことでしたね。どうもありがとうございました。永井君どうですかね。

永井：はい。自分はリベラルアーツ学部で、最初は中学校の国語の先生になろうと思って、リベラルアーツ学部に入學して、それは、その自分の中学校の時の部活の先生に憧れて先生になろうと思ったので、部活も教えたくて、国語も好きだったのでリベラルアーツ学部に入學したのですが、小二免は可能性を広げるのにとっておこうと思って受講したのですが、学部で夏休みに北海道へ授業をしに行くプロジェクトがありまして、そこで小学校の教壇に実際立ったりとかする中で、小学生というのは先生が全教科教えなければいけなくて、その教科によってもまた子どもも違う顔を見せますし、それに凄い魅力を感じて、小学校を受験しました。やはりリベラルアーツ学部だからこそ、今もボランティアに行っていて、凄くいろんな子がいるのと同じように、リベラルアーツ学部もいろんな友達がいるので、自分の中の引き出しがたくさん増えたので、いろんな子供に対応できるようになったなという。教育学部だったら教師になるだ

けっという、先生という道で走っているのですが、リベラルアーツ学部だといろんな寄り道もできるのですごく視野が広がったと感じています。

田子：とってもこれからの子どもに接することができる先生が育ちつつあるなと感じています。小嶋君はどうですか？

小嶋：僕は基本的に、小2 免受講したのも玉川の工学部を受けようと思ったのも親のすすめなのですね。

田子：いいお父さんです。

小嶋：教師をやっているのです。最初教育学部を受けて僕も落ちたのですが、工学部とか理系の学科に行って、教職の免許がとれると最初知らなかったの、親とか担任の先生に言われて、玉川で免許が取れることを知って受験しました。

田子：小2 免の、この特別プログラムについてということで、今日はお尋ねしたいということが話のテーマとしてありまして、これは森山先生からいろいろ聞いていただくんですけども、そのきっかけとして、小2 免プログラムというのは小嶋君の場合はどういうかたちで大学入る前に知ったかという、先生から聞いたということ？

小嶋：小2 免は大学入って、2 年生の時に受講するかしないかという話を聞いて、親に相談したところ受けた方がいいと言われて受講した。

田子：そうですね。みんなそんな感じですか？大学入ってから？（小2 免プログラムがあることを知った？）

小林：私は入る前から、大学のパンフレットなどで、、、。

松永：私も入る前に

森山先生：入学する前に知っていたという方は、それがあから玉川大学入学ということの一つの動機に大分なったのでしょうか？

松永：はい、そうです。

永井：はい、そうです。

森山：2 免がそれぞれの専門の学部で取得可能ですというところが入学の志望の一つの要素になったということですね。学校の教員、第一に中高の免許はとるということは前提で、加えて小学校の免許もとれるから、芸術学部やリベラルアーツ学部に入學しようと、そういう感じで思ったわけですね。教育学部を受験されたかたもいらっしゃいましたけどね、結果的には同じになりましたね。ただ、道のりは違いますよね。4 人ともそれぞれの道があって、その中で小学校のライセンスという形に結びついたということが、よくわかりました。私自身も教職大学院に所属しているんですけども、教職希望以外の学生は誰もいない。ある面では純粋な集団なのだけど全体から見ると特殊な集団、そういう意味でいけば皆さんの場合はいろんな人の中で、その中で、自分の教職という資格をとって、その教職を履修したいということで、ゴールまで 4 年間いったということですね。いろんな経路があっていいんじゃないかなあと私なんかは実感しています。具体的な質問ですが、特に小学校の 2 種免許 3 年次から 2 年間の学びを集中的にやりましたね。1.2 年の単位も当然あってのことでの 2 免は成り立っているわけですけども、2 年間とくに 2 免とそれぞれの学部の免許、いわゆる中高の免許を取得して、最終的に卒業の時にどちらも取得できるというかたちになったわけですけども、この W 免に限定してお伺いをまずしたいと思います。受講した時点、3 年生のはじめの頃かあるいは 2 年生の終わりの頃をイメージして、小学校の教員に対しての意欲とか気持ちとか、小学校の免許に対する思いが、現時点（採用試験を合格して、3 月に免許をもらい 4 月から小学校ではたらくという今）でどう変化したか聞かせてください。

小林：指導法を W 免で学んで来たのですが、テキストを読んで、自分で消化してレポートに出したり、スクーリングだったりするのですが、特にレポートの場合は机上の空論というか書いていて終わる。ボランティアに行っているのですが、ボランティアに行くと、「あっ、そういうことだったのか」に気づくことが多かったので、現場を見つつ、レポート課題をやると分かる。もし、ボランティアに行っていなかったら、ちょっと机上の空論なのかという印象がある。

森山先生：もし、ボランティアに行かなかったらイメージがわかなくて、なかなかモチベーションが上がっていなかったかもしれないということですね。ありがとうございました。

松永：私は 3 年生の時はレポートを終わらそう終わらそうと考えていました。ボランティアもしていたのですが、なかなか学んだことを生かす場があまりなかったです。今もボランティアをやっているのですが採用が決まってから、テキストで学んだことをやってみようとか、例えば児童心理とかで、テキストを読んだことをやってみて、これはこういう時に使うものなのかなとか感じるようになり、そういう変化がありました。

森山先生：やはり、テキスト履修の次の段階として、実際にボランティアに学校に行って、そのことにより意欲とかやってみようとか小学校の教員になりたいなとか早く教壇に立ちたいな

という気持ちがどんどん上がってきたなって感じですかね。テキスト履修だけではなんとなく、やっけていてもピンとこないわけですね。

永井：自分は、夏のスクーリングに出たことが自分の経験として、すごく大きくて、いろんな社会人で働いている人や現場で働いている人の話を聞いたことで、スクーリングに出たことでいろんな知り合いが増えたので、そこで聞いた話などがすごくモチベーションになりました。あとは先ほども言っていたように、自分も図工科指導法などで学んでいたことを実際にボランティア行って図工で子供をどうほめるとかも凄く勉強になった。

森山：スクーリングは年配の方が現在中高の学校の先生をなさって小学校の免許をとりにくるという方もいらっしゃいます。まったく集団がちがいますよね。ただ道はある程度同じですもんね。教員になりたいとか、あるいは小学校免許取得ということでは共通しています。私も昨年度までスクーリングの授業を担当していたのですが、70代の方とかいらっしゃいます。これは教職という意味



ではなく大学の学士の取得のためにということでした。その中で20代の方も10代の方もいらっしゃるという、そういう中でいろんな交流を皆さんやってらっしゃいました。おそらくそういう意味での交流が今でも関係しているということですね。

永井：はい

森山：そうですね。ありがとうございました。小嶋君いかがでしょうか？

小嶋：最初の方は、レポートを早く終わらせようとか、スクーリングをはやく終わらせようとか免許を取るために必死になっていましたがスクーリングで授業を受けて、指導することの楽しさを知り、採用試験へのモチベーションを上げるきっかけになった。学科の授業だけ受けていたら多分周りに流されて勉強が遅れたりしたと思うのです。小2免をやっている中で気持ちの面からも入れていかないと、採用試験、受かったあとが辛いだらうとか考えるきっかけになりました。そういう意味ではやってよかったなと振り返ると思います。

森山：実際に指導法は具体的なことをやりますからそれによって、イメージが膨らんだりするのですよね。そういう意味ではテキスト履修だけの場合では、なかなかそこまでのイメージが湧かないけど、ただ、そこでテキストを通して勉強していたからこそ、現場へ行って、こうやってみようとかそういうことにつながったということです。とくに小学校の免許取得まで指導法という

話がでましたけど、やはり、指導法の科目というのは、テキスト履修だとイメージが難しいでしょうか？

松永：教育実習の時にすごく困りました。授業を全然見ていなくて、自分が小学生の時の小学校の先生しか見たことないから、スクーリングでも模擬授業をしてくれる先生はそんなにいなかったです。全教科見られるわけじゃないので、テキストの指導案を見ただけでは、どういう風に授業をしていくかながれもわからなくてそれが一番困りました。

森山：なるほど、いかがでしょうか、みなさんご自由におっしゃってください。
指導法について、今もご指摘いただきましたが、

永井：確かに教育実習を自分たちの学部で受けてから小学校に行く（実習に）ことはあっても、やはりそこでやる教科は自分の専門ではないので「じゃあ算数をやってくださいね、算数とこれとあれとってくださいね」と1日実習の時に言われた時に、どう授業を組み立てていけばいいのかということが、自分の専門だったらこういう風に考えてやっていこうということができませんけど、そういうことが全くできなくて。自分は国語が専門というのは理系が苦手だからということもあるので、算数をどうしたらよいのだろうと。小2免を最初に受講する時に、自分で受ける科目をきめるので、その時に、算数とか理科は受けたら自分はダメだと思って、外してしまったので、理科指導法や算数科指導法の授業を受けられなかったのが今となってはすごく後悔しています。算数科指導法や理科指導法をとっておけばよかったなっていうのを教育実習で感じました。

森山：ですから、とにかく必要に受験して、その時とにかくがむしゃらにやって、なんとなくやりきったということですね。

小嶋：スクーリングで指導法の授業を受けて、テキストだけだったら生徒の反応とか児童の反応などを予想するときに2つの方向でしか予想できなかったところが、スクーリングに来ている人たちと話しあったり先生に教えていただいたりすることで、自分では考えられなかった方向に考え方を広げることができ、受講していて楽しかったです。

森山：テキスト学習で自分で考えている一方通行の時よりライブの授業であれば、お互いに一緒に考えたりして、「私はこういう風にやるんだけど」ほかの人はね、「自分はこういう風にやりたければ」というように、答えは一つではないという視野ができることはとても大きなことですよ。テキスト履修だけではなかなかそこは難しいところですね。まさに履修の方向というのは、テキスト履修のメリットはまさに、自分で一生懸命しらべたりして力がついたと思うのです。だけれども指導法科目や実習などのようなときには難しいときがあるといことですね。ありがとうございます。

では、全てスクーリング方式で取得するという事はどうでしょうか？レポートがなくて全部がスクーリングの方式にするっていうのはどうでしょうか？

松永：それはちょっと辛いかなと思います。得るものはすごく多いと思うのですが、やはり、他にもやって人間性を高めた方が（良いのでは）。私は、教師として勉強を教えるだけが教師ではなくて、子どもたちの心の支えになったり、良さを伸ばしてあげるとか（子どもと）共感できるのが本当の教師かなと思っているので、指導法で授業がうまくなるのはもちろんですが、旅行に行ったりとか、なんか部活やったりとかいろんな自分の趣味とか趣味じゃないことなどの幅を広げていくことも大事だと思うので、自分でバランスよくできた方がよいのではないかと思います。

森山：はい、ありがとうございます。他の方がいかがでしょうか？

永井：スクーリングって最初3つまでと決まっているので、それは最初から決まっているので、そこは無い方がいいと思う。スクーリング多めにして、レポートもというか。その方が、受講するときの自分のスタイルに合わせてやるので、モチベーションとしても持続できると思う。自分の友達で、3年生で辞めた人は、レポートが間に合わないというのがあったので、スクーリングだったら受けられたっていうのがあったので。

森山：そうですね。柔軟で弾力的なプログラムのほうがいいんじゃないかと、選択肢を広げた方が、スクーリング全部というのも問題だということですね。

学生：同意

小林：スクーリング全部だと4年生の夏にもスクーリングをやるってことで、やはり試験対策にも難しいのではないかなと思いますね。教育実習が終わって、スクーリングになってしまうので、（スクーリング全部では）ない方がよいと思います。

森山：そうですね。小嶋君どうですか？

小嶋：まったくその通りだと思います。

森山：なるほど。そうすると全てがレポートも問題があるということですね。小学校2種免の方はすべてレポートと試験というのはどうですか

小嶋：それが、自分だけでやると、さっきの、、、

森山：さっきの話スクーリングでいろいろな人の意見をきくことで自分で考えられなかった問題の解決を学べることに繋がるわけですね。

永井：レポートだけだと、自分も本当に試験を受けなければいけない、レポートを出さなければいけないとなると、どうしてもレポートがおろそかにじゃないですけど、本当に一夜漬けな感じで書いて作ってしまうので、全部レポートにすると本当の学びにはならないのではないかと。

森山：学びが深まらない、やっつけ仕事になっちゃうということですね。なるほどね。いかがですか？（松永さん） どうですか？

松永：私はさっきの永井君の意見に賛成で、やはりスクーリングとレポートを自分で選べた方がいいのではないかと。レポートは苦手だけどテストはできるという子もいるんですよ。なかには。なので、自分の学習に合わせて勉強できれば、もっと自分の学びたいものは自分でとって、というようにできるのではないかなあと思います。

森山：はい、そうですね。小林さんいかがですか？

小林：例えば音楽科指導法って、テキスト見ても分からないですよ。実技系はやはりスクーリングで受けた方が絶対身につくと思いますし、だからと言って、レポートだけにするって言うのも難しいのではないかと思います。

森山：やはり、これも先ほどの指導法も含めてですけど、状況に応じて弾力的に履修方法を考えていったほうがよいということですね。では、テキストのみでは理解できないなあという教科は何ですか？覚えている範囲でよいので。

永井：体育。体育科指導法を見ていると、どういう風に子どもが体が発育していくのかというのは学べたのですが、では、実際にどのような体づくり運動をして、どういう内容でスキルアップ、スキル運動していくのかとか、ということが全くテキストだけだとイメージできないですし、自分が実際に動いてやらないと、どういう運動なのか、じゃ、どういう指導をおこなえばよいのかということが全然わからなかったなあと思います。

森山：せめて DVD とかね。

永井：はい。なんかそういうのがあれば（良かった）

森山：そういう補助教材があればいいということですね。

学生：(同意の相槌)

森山：いかがですか。他に、体育についてはみなさん「うんうん」って言ってらっしゃいますが、他の科目はどうですか？

松永：音楽。ちょっと（はっきり）覚えてないですが、楽器の使い方で唇のかたちとかこうやるって書いてあるけど、楽器がないし、絶対できないのだけどって、それは、ちょっと「へっ」って読んだだけで、多分「やれっ」って言われたら実際できないかなあと思います。

森山：説明だけして自分はできないってことですね。他は、いかがですか。芸術系から見てどうですか小林さん？

小林：わたしは、実技系は全部スクーリングでとったので。あとは多分大丈夫だったのかなと思うのですが。結構いろんな教材に文章だけではなく、図とかがあったので、「あっ、なるほどこういう風にやれば良かった」と分かる教材が多かったのもその点は、理解しやすかったと思います。

森山：ありがとうございます。他の教科はないですか？

小嶋：体育で、実際にスクーリングやれたので、動きを。はい。

森山：なるほど、イメージ通りできたってことですね。ありがとうございました。玉川大学は、みなさんに履修して頂いたとおり、通学課程のいわゆる、其々の学部の中で中高の免許課程を履修されて加えて、このダブル免の場合は、通信教育課程による、授業を受講したり、レポートを作成して、その後試験による単位取得という形の両方を4年間の中で実施しているわけです。ある意味ではすごく凝縮して、二つのものを期間を同じで履修されて取得されたということで、力がついたと思うことってありますか？通信において夏休みのスクーリングもやったレポートも書いた、試験もやった学部のほうのレポートも書いて、いろいろやったんですよね。4年間ふり返って何かありますか。永井君どうですか？

永井：自分は二つありまして、ひとつは、同じ科目を2回とったりするので、採用試験の時の筆記試験で、でる教育法規とか教育心理とかすごく「これやったやつだなあ」というのがあったので採用試験にはよかったと思う。自分の学部で専門の教科があったぶん、実習（小学校）へ行った時に、「この教科は大丈夫だな」という自分の武器になる教科が、国語があったので、そこ

はすごく両方で学べてよかったのではないかと思います。

森山：それは、だいぶ力がついたのでないかと、、、。永井君に口火を切ってもらいましたが他の方はどうですか？

松永：私は、スクーリングで教育の方法と技術という 3 年生の夏に受けて、その時に子どもとの接し方や授業の進め方というのを自分の学部の指導法の時よりも、凄く詳しく教えてもらって、それを中学、高校の英語の模擬授業の時に生かしたりだとか、実際に中学でも生かしたりとかすることができたり、あとは、友達に指導法の時のことを教えてあげたりだとかそういう風にできたことが凄く良かったと思います。私は英語の免許をとって、小学校でもまた英語が始めるので、今小学校の先生方は、結構、英語が分からないという先生が多いのですが、その中で、自分は中学、高校の英語の免許を持っているとか小学校英語の資格をもっていることが強みになって、他の教科はまだちょっと分からないのですが、専門性（他の教科）に欠けているところもあるのですが、そうやって自分の強みがあるので自信をもって子ども達に教えられることがいいのかなぁと思います。

森山：はい、ありがとうございます。では、他の方はいかがでしょうか？

小林：私は、音楽が専門なのですが小 2 免の音楽科指導法のスクーリングをとったんですよ、何故かというと、私たちができる、あたり前で、できない子って何ができないんだろうって思って、スクーリングに行ったら、いろんな人がいるから、多分できない人もいるし、それを把握できれば、何ができないのだろうと考えられるなと思ってとったのですよね。やっぱり、そこで躓くのだなとか、そういう風に考えるのだからってことがスクーリングを通して分かった ので、とって良かったというのもありましたね。レポートとかはギリギリにやるのではなく、計画を立ててやるというところでは身についたなと思います。

森山：自分で一応計画をして、その通りになるべくやろうという計画性がついたということですね。では、いかがですか小嶋君？

小嶋：みなさんが言ったことと同じで。学科の友達と話していて、小 2 免をやっていた方が、知識が広がったかなというように思いますし、採用試験に繋がったとも思いますし、あと、小林さんが言ったように計画を立てて勉強するという面でも、今までも計画は立てていたのですが、より一層定着したかなぁと思います。

森山：自分で自分をコントロールしていかないといけないという感じがあるのですね。

今、お話をうかがっていて、小学校免許をとっていたからこそ中高で良かったなぁ、役に立つ

たなぁと思うことがありますか？

小林：地域によって、生徒の実態というのはそれぞれなのですが、時々音楽の人でもわかってない理解できていない時に、自分がどうやって説明していけばよいのだろうと思ったのですが、小学校の指導法を受けて、「これは、こうだね」というのを聞いて、あっ、そうやって説明すればよかったんだな、ということがあったので、子どもというか、分からない子にもわかりやすく教えられるっていうのは、やはり小学校の方法がいいかなって感じられました。

森山：ありがとうございます。

永井：自分は、中学校の教育実習に行った際に、国語だけではなくて、朝の自習とかで数学とかみる機会があったのですが、そういうので躓いている子というのは、小学校の算数で分かっていないところもあったので、小学校の勉強をしていたからこそ、そういうところで躓いていることが分かって、教えることができたことが、小学校を受けていて良かったなぁと思います。

森山：なるほどね。数学で特にね。影響あるかと思うのですが、いかがでしょうか？

小嶋：小学校でも、数学課程だけだったら、指示があいまいでも中学生にとっては、あいまいというのも何ですけど、小学校もっと明確にやらないといけないじゃないですか、中学校だったら、「教科書何ページ開いて」って言っても小学校だったら「まず教科書出して、何ページ開いて、ここ見て」とか、そういう細かい指示を小 2 免で知れたのはよかったと思います。実習でも唯一褒められた点が「指示」だった。それは、小 2 免やっていたからかなぁと思います。

森山：そういう感覚で身につけているということですね。ありがとうございます。

今度は逆なのですが中学校や高校の免許をとって、勉強しているからこそ、小学校の実習とか小学校の免許の課程で結構役だったなとか、小学校だけじゃなくて中高やっていたからこそ、良い面があったなぁという思われる場面が、なにかありますか？今度は小嶋君から。

小嶋：はい。中学校、学科の勉強ではありませんが 2 次試験の面接で、中学校は中学校でいろんな教科の理科の人達が集まってやった時に、その理科の子が言っていた指導のやり方を聞いて、それを良いなと思ったのを、小学校の実習で理科の時に実践できて、パワーポイントを使ってクイズを作ったのですが、それをやって、意外と子どもの評判が子どもの反応が良かったので、中学校でもとっているいろんな人の話を聞いたことが生きたなと思います。

森山：中学校教員にかかる免許状の取得での学習内容が今度は小学校教員免許取得の中でも役に立ったということですね。なるほどね。それは理系の分野でやられたということですね。はい、

では、永井君いかがでしょうか。

永井：はい。自分は国語を学んだことで、小学校の教育実習では、国語を本当に普通の教育実習ぐらい〇コマ数持たせていただいて、一科目やったのですけど、そこで、中高でやったからこそ、「こういう話があつてね」という中学校ではこういうことを学べるとか。いろいろなその先のことや豆知識として話としてできたので、その分、子どもが「あっそうなんだ」と結構興味を引いてくれて、そういうのができたのはやっぱり、中学校で1回実習をやったからだと思います。

森山：やはり、深く勉強したものがあつた程度、小学校でも転用できたということですね。

松永：はい。私は、英語なので、そんなに小学校の授業で生かしては無いのですが、中学高校で英語はどういうことを学ぶのかということはある程度知っているの、小学生に、これは英語でなんて言うの？とか質問された時に、こういう風に言うのだよ。中学校で習うから楽しみだね。とか子ども達に見通しをもたせられことが逆に良かったかと思ひます。

森山：なるほどね。専門でだけで勉強しただけでなくて、教職の英語、教職の国語ということで、あるいは教職の数学ということで勉強しているから、非常に小学生に適応できるようになつていくということですね。英語はこれからすぐに英語は課報される教科になりますもんね。

小林：私は実技系なので子ども（の前）でやってみると、みんな「本当に凄いな」と言ってくれるという感じがあるのと、中学校のビジョンを先に見たので、中学校で、あーしなければいけないので、小学校では、きっとこういう力を身に付けなければいけないなつていうことが分かつたので、中学校の課題を中学校で消化するよりも、小学校でちょっとなんとかすることはできないかなつていうことが考えることができたので、その分良かったのではないかなつて思ひます。

森山：おそらく、今お話を伺つたとおり、やはり、中学校までを見通して小学校の授業ということが、あるいは小学生に関わる内容が理解できるということですか。そういうことがうかがえるお話しでした。これは忙しかつたかもしれないけど、その分逆もとても有効につながつていくという感じで伺ひました。

それでは、私の最後の質問ですが、この小中免といふかな、小学校と中高免許の複数の免許をとるといふことは、みなさんにとっては頑張つて、とつたことなんですけど、小学校の教壇に立つにも例へば、それぞれの専門の学部で勉強して、その中で、小学校の免許をとるのいいよと推奨したいですか？あるいは、その理由は、これだからこうだよ、といふ一番の理由はありますか？あるいは、このあたりは問題だよ、課題だよといふことがあれば加えて教えてください。

小林：私は、勧めますね。人間性的にも学業的にも自分が伸びることができると思ひるので、私は

すすめます。

松永：私はやっぱり、その人にもよると思うのですが、ついでにとっておこうと思って、絶対に英語の先生になるとか、国語の先生になるとか決めている人だったら、私は、レポートで勉強しても身にならないのかと思うので、それだったら、中学高校の専門分野をしっかりと勉強して、先生になったあとからでも小学校のことってまだ学べるから、やらなくてもいいのかと思うのですが、小学校をとってみたいなっていう子がいたら、絶対にすすめます。

永井：自分は本当に最初は中学校の国語の先生になろうと思っていたのですが、とったのは、自分の可能性とか選択の幅を広げようと思ってとったので、とりあえず、とれるならとってみて、そしたら、自分のその選択の幅が広がるので、自分はそれですごく良かったので、その選択の幅を広げる意味で、本当にとるんだったら是非とったほうがいいかと思う。

小林：僕も皆さんと同じように、勧めると思うのですが、でも、そんなに甘い気持ちではなくて、ちゃんととるのだという意志があるのだったら、すすめます。そうでないのだったら、両方中途半端になっちゃうので、ちゃんとそういうようなことが計画的にやれるなら、やりなよって言うと思います。

森山：ありがとうございます。田子先生何かありますか？

田子：みなさんの話を聞いていて、ダブル免と言われている、中高の免許と小学校の免許をとるっていうね、形式としては、2種類の免許をとるということなのだけでも、それによって、一つは、やっぱり、小学校と中学校との連携とか一体性とかということは今言われているのだけでも、そういうことが本当に学ぶ過程で力として身についてくるのだから。免許というのは形なのだけでも、その中に、みんなが、これから教育者として活動していく場合も、本当に必要な能力がね。学んでいる中で、身についてらっしゃるのだなということを感じて、私は、新しい気づきを得ました。それは、やっぱり、そのことが今日聞けたということは、この特別プログラムというのをやっていく真の意味があるのだと思ったので、とても今日は良かったです。私の感想を言わせてもらいましたけど。本当に、ありがとうございました。

全員：ありがとうございました。

森山：本当に今日は私も先生と同様です。すごく勉強になりました。教育学部とか大学院の方ばかり関わって、こちらのみなさんと初めて今日お会いしたのですよ。そうですね？

学生全員：はい。初めてです。

森山：そうですね。

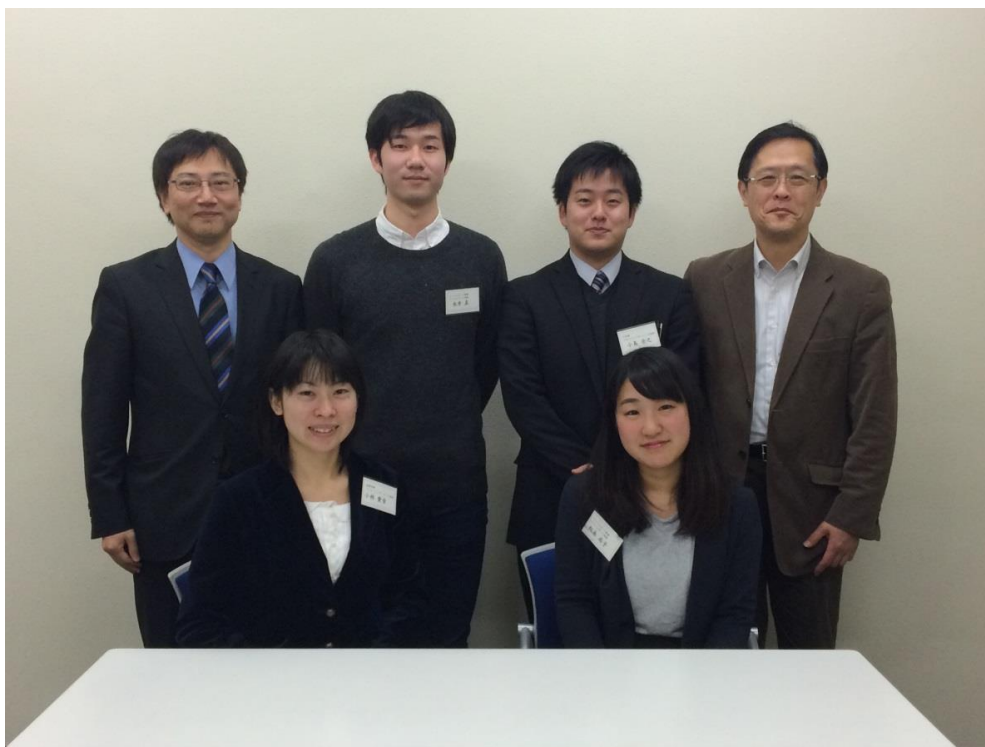
田子：私の方がまだ（会ったことがある）

森山：皆さんに今日はお会いできて有り難いと思います。

これから、みなさんのような気持ちをもって小学校の免許をとりたいという人たちにも、また一生懸命支援をしたいと思います。まさに皆さんの後輩が、こういうかたちでの小学校の教員を目指していくことに対して、私たちとしては一生懸命サポートしていきたいと思っています。今後とも、よろしくお願いいたします。

また、4月から新しい職場でスタートされるということですね。それこそ自信を持って堂々と頑張ってもらっていただければ有り難いと思います。また、これから後も、皆さんの後輩たちのためにも、またいろいろお話を伺ったり、あるいはサポートして頂いたりする機会を、作りたく思いますので是非ご協力いただければ有り難いと思います。今日は本当に貴重な時間をとっていただき本当にありがとうございました。

全員：ありがとうございました。



第4章 公開研究会

平成27年2月16日

文科省委託事業「平成26年総合的な教師力向上のための調査研究事業」公開研究会

発表者

- ・講師 大正大学 教職課程 主任 滝沢和彦先生
- ・講師 東京情報大学 原田恵理子先生

司会

- ・玉川大学 教師教育リサーチセンター 事務長 高橋正彦

高橋：本日はお忙しい中、文科省委託事業「総合的な教師力向上のための調査研究事業」公開研究会にお越しいただきありがとうございます。本日は委託事業の責任者でございます本学の森山。それから大正大学の滝沢先生と東京情報大学の原田先生からお話をいただく機会をもうけさせていただきました。

では、お手元の資料をご確認させていただきたいと思います。この委託事業に関して、本学で小学校2種免許を履修している4年生4名のヒアリングを森山と田子でおこないました。その資料が1部。それから小学校2種免許を履修している学生に対するアンケート調査がA4判で1部。それから「芸術学部小学校過程特別履修に関する意識調査」について本学の学生に対してアンケート調査したものが1部。以上3種類となります。それから参考資料として文科省の委託事業を採択した際の申請書類をご用意させていただきました。本日はこの中の3枚目の裏側にある2月の「小学校教諭・中学校教諭免許の同時取得に関する公開研究会の開催」ということとなります。では、今回委託事業の責任者でございます森山より挨拶させていただきます。

森山：先生方本当に今日はお忙しいところありがとうございます。本学の文部科学省調査研究事業の「総合的な教師力向上のための調査研究事業」ということで、今年度採択されました。研究事業の一貫として「総合大学に開設する小学校の免許取得講習の多様な試みに関する比較検証」というテーマで1年間研究をすすめてまいりました。特に先生方も承知の通り、今回、中教審におきましても小中一貫校の設置に伴う、いわゆる免許の併有といえますか複数免許で校種にまたがって、つまり、小と中や小・中・高というかたちでの免許の併有についての議論が盛んにおこなわれています。特に先生方の大学でも中・高免の学生を中心に、加えて小学校の2種免許状のいわゆるダブル免許に関する取得ということでの教職課程の運用をなさっておられるということで、本日そのあたりの所を是非お伺いして、わたくしどもも勉強させていただければ有り難

いと思います。玉川大学におきましても、教育学部以外で教職課程を履修している学生にしましては、昨年度までは通信教育を利用した、ダブル免の小学校免許の取得。そして、今年度から正式に小学校課程特別履修という名称となり、全てが対面式の授業形態で取得するという形になりました。夏期セッション、冬期セッションを中心に長期休暇を利用して学生がダブル免の小学校免許状の取得に励んでいます。これに関してはメリット、デメリットがございます。単純に免許を中高に加えて小学校 2 種免許を取得するという事は、単位をとれば免許はとれるわけですが、そこには質というものも重要なキーワードになっていると思います。どのような形で免許を取得させていくか、いわゆる講義なり通信なり授業の形態や履修の方法、履修の時期、また中高の免許にあわせることで小学校の免許をどのようなカリキュラムで履修させていくか、という様々な課題があるわけです。ですから今申し上げたとおり実際には20数単位とれば小学校 2 種免許はとれるわけですが、我々はそういった中身の様々な問題をしっかりとらえて解決していき、よりよい併有のシステムを構築していく必要があると思っています。

そういう意味では、本日まで出席いただいております、大正大学の滝沢先生、東京情報大学の原田先生にしましては、実際に中高の免許状取得の学生に加えて、小学校の免許取得についての学内で重要なお立場で実際に学生のプログラムあるいは直接のご指導等にあたられているということで、我々もしっかり勉強させていただきながら今日は有意義な時間をとらせていただきたいと思います。また、先ほど事務長よりお話しがありました通り、本年度の研究会、これまでの研究の資料をとりまとめさせていただきまして、報告書をつくらせていただきたいと思います。文科省より報告は義務でございますので、この後、着手させていただきたいと思っております。本日の先生方の貴重な講演、そして、そのあとの意見交換も含めて、報告書に掲載させていただければ有り難いです。これが、今後の開放制の中等教育の免許状を出している大学が加えて小学校の免許状を出す過程を履修するという非常に大きなデータになっていると思います。そういう意味で、この後もよろしく願いいたします。本日の文部科学省の調査研究事業の代表者小原芳明学長でございますが、学長の方からも先生方にくれぐれもよろしく願いいたしますとのことでしたのでご出席の皆様にお伝えいたします。

高橋：それでは早速でございますが滝沢先生の方からお願いできますでしょうか。

滝沢：滝沢でございますよろしく願いいたします。いま、森山先生から研究会の趣旨をお話しいただいたところですけども、とてもじゃないですけども具体的な内容ではありません。先ほど原田先生ともお話ししましたが、このような機会に振り返ることで反省することができ良かったと思います。

本日は、「大正大学における教職課程及び小学校教諭免許状取得の現状について」ということで報告させていただきます。ご存知だと思いますが大正大学は、いわゆる仏教の宗派、真言宗の智山派と豊山派がございます。それから浄土宗と天台宗の 4 つの宗派がございます。日本で唯一の仏教連合大学ということだそうです。大学の名前の由来の大正ですが、大正大学としてスタ

ートしましたのが大正 15 年です。もちろん僧侶の養成ということで始まったのですが、その時から、今でいう専攻科ですかね、それがあまして、中等教育の養成というのは戦前からしていた、ということだそうです。戦後になりまして新生大学としてスタートしましたが、教員養成の仕事はずっとやってきておまして、そろそろ定年をむかえる校長先生方から、「最近、うちのほうに（大正大の卒業生が）来ないじゃないか」など言われたりもしております。

1.大正大学における教職課程の現状

(1) 学部学科の構成と取得可能免許状

今日は数字を出してお話しさせていただきますが、とても忸怩たる思いで数字を出してお話をいたします。まったくの文系の学部なのですが、学部学科の構成と取得可能免許状ということで整理しておきました。現在は 4 学部体制です。仏教学部仏教学科がございまして、ここで中学社会、高校公民と宗教が取得できます。それから人間学部。近年改組を繰り返しております、いろいろ学科が変更しておりますが、まずは社会福祉学科、以前は高校福祉で出しておりましたけども数年前この課程は返上いたしました。そして臨床心理は高校の公民だけ取れます。人間科学科は心理学と社会学が中心の学科です。ここでは中学社会と高校公民が取れます。実は私も最初は人間科学科に所属しておりましたけれども、平成 20 年にそこから新設の教育人間学科へ移りました。独立したということになるのでしょうか、当初は、文学部哲学・宗教学の講座も一緒に移ってきてまして、どのような学科の性格にするのかといった時に、教職課程の教員として教育人間学科に移ったわけですが、もう少し教育で特色が出せないか、という話を当時いたしました。特に哲学・宗教学、昔からの大学でこういった哲学や宗教学の研究と教育の実績がございまして、そういったところで第一次安倍内閣の頃でもありまして、「こころの教育」「いのちの教育」などで特色が出せないか、ということで教育人間学専攻を人間科学科の中に作ったのが平成 20 年のことです。その時には中学社会と地歴・公民さらに宗教と、専攻の定員の割には欲張って免許状をとれるようにしました。その 2 年後に学科内の専攻から学科へと独立して今日に至っているということです。以上が人間学部です。

それから文学部ですが、こちらは人文学科の中に日本語日本文学コースというのがありまして、中高国語が取れます。また、人文学部の中に哲学宗教学コースというのがありまして、これは一度、人間学部の方に来ましたが 2 年後に文学部の方へ戻ってしまいまして、こちらでは、公民と宗教が取れます。それからカルチュラルスタディーズコース、これは、英文学の先生などが所属されているのですが、取得免許はなしということになります。あと歴史学科がございまして、日本史と西洋史と東洋史のコースで社会、地歴が取得できます。

それから表現学部というものが数年前にできました。この中に英語表現・コミュニケーションコースというのがありまして中高英語、それからクリエイティブライティングコース、こちらは書道の先生が所属しておまして書道の免許が取得可能でございます。

それ以外のコースもございまして、学科としての免許取得はございません。ただ、いわゆる他学科聴講を可能にしておまして、学科をまたいで単位をとることで社会や国語の免許を取得す

る学生も数名ですがいます。

(2) 免許状取得の状況

私が大正大学に参りましたのは平成 15 年（2003 年）です。そのころは、大学全体で 800 名ぐらいの定員でした。今は 1000 名少々なのですけども。当時は教員養成を希望する学生が 200 名ちょっとでした。120 名から 130 名くらいは教育実習に行っていました。ここ数年は減ってまいりまして、入学当初希望（教職を）する学生が 150 名前後です。教職課程の科目自体は 2 年生からなのですが、最初のガイダンスに来て取り始めるのは 110 名程で、実際教育実習へいく学生は 770 名前後です。それで、今年度免許状取得の状況ということで今年度（平成 26 年度）、教育実習へ行った学生は少な目で 65 名でした。

まず仏教学科からですが、仏教学科は、定員 100 名程ですけども 8 名です。皆さんお坊さんのお子さんで将来は自分のお寺の幼稚園の先生をやるかと思います。とった免許の種類ですが社会が 7 名、公民が 7 名、宗教が 5 名、それから他学科聴講で取ったということで地歴が 2 名です。それから人間学部ですが、福祉・人間環境はなしで、臨床は 1 名だけ公民で免許を取りました。ちなみにこの学生は北海道の私立大学の大学院に進学します。それから人間科学科 1 名、彼は高校の公民の免許だけ取りましたけれども、卓球のスポーツ推薦できていて栃木県の私立の母校で専任教員になることになっています。それから私が担当している教育人間学科ですが、25 名免許状をとる予定です。実際入ってくるのが 75 名くらいですが最初は教職課程希望が 30 数名で、半分は教職課程をとろうと思っていたのですが途中で辞退というか挫折ということになりました。免許状の種類ですが社会が 24 名、地歴が 22 名、公民が 23 名、と学生のほとんどが地歴公民と両方取得しております。それから宗教、先ほど言いました「いのちの教育」ということでこういった科目がありまして、宗教で免許状を取得したいという学生が毎年おります。それから他学科聴講で国語が 2 名。それから資料の方は、太字にしておきましたが小学校の方で 5 名です。この 5 名ですが、全員小学校の採用試験を受けてはいます。一次は通ったのですが、残念ながら二次で不合格となっております。

それから文学部です。日本語日本文学コースで履修者 8 名ですが、中高国語で 8 名、さらにそのうち 2 名が小学校免許をこの春、取得予定です。ちなみにその小学校を履修したうち一人が、長崎県の中高一貫校で国語の常勤講師が決まっています。それから哲学・宗教コースで 1 名履修して公民だけの免許状を取得予定です。そしてカルチュラルスタディーズコースが 0 名です。歴史学科が 16 名履修です。以前は歴史学科の学生の方が教職課程を履修する人数は多かったのですが、最近は教育人間学科の方が多くなってきました。中学の社会 15 名、地歴 16 名、他学科聴講で公民を取得したものが 1 名ということです。地方の高校で地歴の専任で合格した学生がおります。それから表現学部は、中高の英語で 2 名です。中学校の一次は受かったのですが残念ながら二次でだめでした。それからクリエイティブライティングで 2 名、1 名が書道、1 名が国語を他学科聴講で取りました。それから、専修免許状、大学院で取得した学生が 2 名で比較文学専攻の学生は神奈川県で英語の専任に決まりました。あと、科目等履修生は昨年春の卒

業生で、昨年度教育実習に行けずに今年度卒業をしたということで、社会と宗教です。以上のような状況です。公立の採用試験一次を通過した学生は全部で12名でした。そのうち8名が私の担当の学科の教育です、あとは大学院、それから文学部といったところです。

2、小学校免許状取得のための通信課程受講者

小学校免許状取得のための通信課程受講者の免許取得状況です。淑徳大学さんの通信教育課程の元で通信課程を始めましたのが平成22年度のことでした。こちらに関しましては、数字的には非常に反省しなければならないところです。平成22年度に募集をしましたところ4年生で2名希望がありました。もちろん1年間では取得できませんので2名とも卒業後、もう1年間かけて免許状を取得いたしました。人間科学科と歴史学科の学生です。もちろん中高の免許状も取得の上なのですが卒業1年後に免許状を取得しました。1名は卒業後に大正大学の事務職員となり一年後に取得しました。もう1名は学校の支援員をしながら2年ほどかかりましたが千葉県の小学校教諭になりました。それから3年生は5名希望して参りましたが、そのうち1名だけ取得で、その他は卒業までに辞退することになりました。それから2年生で3名ほど希望があったのですが、途中で教職科目単位未修得のため全員辞退しました。

それから2年目ですが、新2年生と新3年生に募集をかけまして、実際募集をかけましたのは、1年と2年の終わりの1月です。新3年生は8名のうち4名が取得、2年生は10名希望があり取得したのは2名ということで、非常に厳しい数字が並んでおります。その3年生で残った4人のうち1人が千葉で小学校専任、3人が都内及び千葉で講師をやっています。そのうち2人はこの春から専任です。

それから平成24年度も淑徳大学さんでの通信です。こちらも4年生になってから希望してきた学生がおりまして、5名中4名が取得しました。それから当時3年生だった学生からの希望は3名ありましてそのうち2名が取得しました。3名のうち1名は結局、小学校の免許が取得できなかったのですが、昨年卒業しまして在学期間から小学校の特別支援のボランティア活動をおこなっていましたが、卒業後も板橋区の中学校の車椅子の生徒の介助員をそのまま続け、今年、東京の社会地歴で合格しました。他の2名は今年も講師を続けています。

続いて、平成24年度2年生、今年の春の卒業生になります。8名のうち5名が免許取得見込みです。そして、平成25年度は淑徳大学さんの方が、教育学部をつくるということで通信の募集が停止になりまして、明星大学さんと交渉しまして通信を使わせていただくことになりました。最大（通信の定員）10名ということになりました。3年生が2人希望で、この春、2人とも免許取得予定です。そのうち1名は採用選考1次合格でした。2年生が8人希望でしたが、2年生から3年生になるときにそのうち2名が教職単位の履修を誤り、教職課程辞退ということになりました。だんだん履修が厳しいということが伝わってきまして希望が減ってきました。平成26年度ですが3年生2名、2年生2名で、がんばっております。ついこのないだ平成27年度春からの募集をかけまして、応募してきたのが全員で7名。こちらで面談をしまして、成績、これまでの学習つまり大学の単位だけではなくボランティアへ行っているだとかなどのヒアリン

グをします。去年もここで8名の希望がありこの面談で半分落とし4名にしました。今年の場合は7名のうち1名落とししました。GPAは良いのですが考え方に引っかかるところがありまして落とししました。

これまで平成26年度卒業生までで、ガイダンスなどの出席を含めまして46名の希望がありました。卒業時に希望者の半数の22名が小学校免許の取得ができました。そのうち専任、講師を含めて現在13名が小学校の教壇に立っております。ということで決して自慢のできる数字ではございませんで、この数字を確認して反省しているところでございます。

3、小学校免許状取得者の声から

現在小学校の教員として、教壇に立っている卒業生数名にメールで話を聞きました。今日の会の趣旨に合っているかどうか分かりませんが下記ご覧いただければと思います。いわゆる一般学部と私のところの教育人間学科を分けた方がよいかと思いました。今まで免許を出している学部は、文学部の人文学科の国語と歴史学科です。

(1) いわゆる一般学部（文学部人文学科、歴史学科）卒業生の場合

(Aさんの場合)

- * 2年生から学校支援のボランティアを行っていた。
- * 卒論は「玉葉について」
- * 歴史学科卒業、現在品川区の講師
- 「歴史は6年生の社会科では強みになると思います。指導書や資料集に載っていない知識を蓄えることができたので。」

(Bさんの場合)

- * 歴史学科卒業、現在千葉県教諭、2年生担任
 - * 大正大学の隣の中学校で3年生の時から学校支援のボランティア
 - * 子どもとの接し方が上手。一緒にボランティア指導していた学生が自信を失くして悩んでしまい教職課程を辞めてしまった。
 - * 本人の感想から教員養成学部と違った（良い）感覚を持ってきている
 - 「参考になるかは、わからないのですが…歴史文化学科で史料を読み取った経験があったおかげで国語の漢文だったり、古文だったりを教えるのに少し役立っているかなと思います。
- 小学校は全教科の指導で、さまざまな方向からのアプローチが必要になります。私もまだまだ柔軟にこなすことができず、日々勉強しながら子ども達と過ごしていますが、この仕事は何よりも人との関わり合いがあつてのことなので、いろんな人を見る力がついたかなあと 생각합니다。」

(Cさんの場合)

*人文学科卒業 現在東京都北区立小学校教諭 5年生担任

*北区の小学校でボランティアを続けていて、その学校に採用された。

*小学校1種を取得

*北区は小中連携が強く、各小学校にファミリーの中学校があり小中交流の授業研究が盛んに行われている

●教科面での強み（日本語日本文学コースとして）・・・直接的な強みはありませんが、間接的に役に立つという感じです。

・「古典に親しもう」という単元が小学校でも導入された。

古典のリズムを楽しみ、親しみをもちつ程度の指導に留まるが、豆知識や読み方、古文の意味などが分かると児童の関心にはつながる。

・物語中に出てくる昔の言葉（おたまじゃくし＝おたま）の語源などを勉強していたため、辞書調べの指導などがしやすい。

・「図書の時間」を国語の時間内に確保しなくてはならない。読書指導やおすすめの本の紹介はしやすい。

●免許をとりやすく（免許を取得する際困ったこと）

・提携大学で取得する場合、事務的処理に2倍の時間がかかる。

・大正大学と淑徳大学の講義や説明会が重なってしまうと、大正大学側を優先しないといけないが、淑徳大学のスクーリングは限られた期間でしか実施されていないため、なかなかスケジュールを立てることができない。

・大正大学の単位を一部使えたが、教育相談等重複して単位を取らなくてはならない。

●とくに小中一貫教育に関わって

・小学校での教育活動（授業内容）が中学校の授業では活かされない。

Ex) ・グラフの読み取りや絵、写真の読み取りをする機会はほとんどない。(暗記型)

・発表や討論なども少なくなる。

(コミュニケーション能力の育成といいつつ、前に出てぼそぼそとノートを読ませるだけ)

・社会科では、各国の国旗と位置も覚えさせて欲しいといわれるが、指導要領には小学校で教えることにはなっていない。

⇒中、高の免許を持っていることは、小学校の現場では直接的には活かされないかもしれないが、中学校の教員が小学校でどのような学習をしてくるのかを把握しておくことは大切だと思う。

⇒小学校でも、中学校ではどのような内容の授業をするのかを調べてから単元指導にあたるように言われている。

・音楽や美術などの技術的なものは、一貫性があるていど確保されている気がする。

・理系科目は、一つずつ確認しながら進めている。

しかし、実験計画などは教委からトップダウン。

- ・文系科目は、プリント学習などで、小学校でやってきたことを更に深めた暗記科目に変わってしまっている気がする。

(2) 教育人間学科卒業の場合

(Dさんの場合)

- *卒業して2年
- *教育人間学科卒業 現在千葉県教諭 2年生担任
- *滝沢先生のゼミ生

- 「私の場合、まだ低学年しかもっていないので、社会科の授業がない分教科指導の面は何とも言えません。生徒指導に関しては、大正大学での教育心理学や特別支援教育についての講義は指導に活かされています。先生がおっしゃっているような、ダブルスクールの形での強みは、正直、免許取得をスムーズに行うことができたという利点だけのように感じます…。すみません。あくまで「私は」という意見ですが、まだ低学年しか担任していないことが大きく、生徒指導の面では年齢が幼く、教科指導の面では該当教科がなく、大正大学で学んだそれらについての知識はまだ現場では直接的には活かせていません。ただ、もちろん教職員としての誇りや自覚といった根本的な部分は、常々身にしみて感じております。」

(Eさんの場合)

- *卒業して2年
- *教育人間学科卒業 現在千葉県で小学校講師（4月から小学校教諭）

- 「強みとしては、自分の持っている免許の教科（社会）においては、中学校の学習への系統を考えると教科指導が出来ることだと思います。小学校の、その学年でぶつ切りの学習にするのではなく、『この単元は中学校のこの単元にこう生きるというのがわかっているから、教科指導の方法は表を見せるじゃなくて表を作るにしよう』や、『教科書に載ってないけれど、この出来事背景には何があったのか予想させよう』など、指導を変えています。中高の免許が無いと、また中学校でのTA経験が無いと、こういう教科指導はできないと思うので、中高の免許が主の一般大卒の良い所（小学校での指導に活かしている）だと思います。」

【教育人間学科卒業生の卒論の論題（参考までに）】

- 「生徒児童が自ら考える道徳授業の実践－小中学校における実践例の研究を踏まえて」
- 「TAの活動において学生は何を学ぶのか－ビデオ記録の分析を通して－」
- 「小中学校における伝統・文化教育の課題」
- 「授業を改善するとはどういうことか－教育実習における教壇実習から考える」
- 「教育連携事業におけるティーチングアシスタントの実践力向上を支援する教材の作成」
- 「実習授業をどう改善するか－TOSSから学ぶ授業づくり」
- 「子どもの暴力に教師はどう対応すべきか－中学生の校内暴力への対応－」

- 「Twitter を利用した自己表現と対面的自己表現の違い」
- 「学校教育における部活動の意義ーこれからの部活指導の在り方」
- 「地域教材の可能性を考えるー富士山をどう教材化するかー」
- 「高校での部活動参加がライフスキルの獲得に与える影響ー部活動の特徴に注目してー」
- 「日本の伝統的食文化を扱う授業づくり」
- 「自閉症スペクトラム児の現状と課題ー学校と家族はどう関わるべきかー」

論文の内容をいくつかご紹介させていただきますと「TA の活動において学生は何を学ぶのかービデオ記録の分析を通してー」では、台東区の小学校で学校支援を TA として行っていた学生が、自分が TA をする中で何ができるかということに問題意識を持ちまして研究が始まりました。彼女が TA として教室に入っているところを私が撮影して、二人で分析して、その後、2 か月後に再撮影して比較するという卒論を作成しました。明らかに、彼女の子どもへの気づきが多くなり歴然と変わっていくことが見られました。また、「授業を改善するとはどういうことかー教育実習における教壇実習から考える」では、ひたすら指導案を徹底的に書くということを行いました。これらは、いわゆる教科専門の卒論ではなく、かなり授業を意識した卒論なので教員養成としても適しているのではないかと思います。

ここまでの卒業生のインタビューを聞きまして、暫定的ではございますが、今回これを考えるうえで 11 月に教員養成部会が報告を出していますのでそちらから引用させていただきます。

4、暫定的結論

(1) 教員養成部会の論点

「これからの学校教育の担う教員の在り方について（報告）

ー小中一貫教育制度に対応した教員免許制度改革ー」

●教員採用における課題

「教育に対するニーズが複雑化・多様化する中、豊かな知識と識見はもとより、幅広い視野を持った個性豊かでたくましい人材を教員として確保することが必要である。また、一層多様化している児童生徒の興味・関心に対応するため、教科や指導法の一部についてより高い専門性を持った人材の確保も必要となっている。さらに、採用における当事者間のミスマッチを未然に防ぐため、採用前において学校現場を体験する機会を増やすなど、互いのニーズを符号させる工夫も必要である。」

●小中両免許状の併有の促進

「今後、小中一貫教育や小中連携教育の取組がより一層広まっていくことが考えられ、小中一貫教育学校（仮称）以外の学校の教員も 9 年間を見通した中での教育を推進していくことは重要

である。(中略) また、教員個人にとっても、異なる学校種での経験は自らの視野を広げるとともに、知識・技能の向上に資するという観点から、両免許状の併有を促進することは有意義であると考えられる。」

⇒

「例えば指導力に優れた教員や教科に関する専門性の高い教員、小中連携教育や小中一貫教育に関する経験の豊富な教員など多様な教員の配置が進み、これらの教員が学校内において幅広く活動できるようになることが期待される。」

⇒

「小学校における専科指導を充実できる」

「小学校教員等が、中学校や小中一貫教育学校（仮称）の中学校課程においてティーム・ティーチングの活用などにより中学校教員等とともに指導を行なえるような体制を構築することも重要である。」

⇒

「さらに、大学の教職課程の内容の見直しを検討する中で、例えば学校種別ごとに修得が求められている教職科目等の統合、小・中学校全体を俯瞰した児童生徒の発達段階や教育問題に係る指導の充実などについても検討を進めていくことが重要である。」

こういったことがこの教員養成部会の報告でありまして、本日のテーマに関わって非常に大事な論点だろうというように思いました。これが一つ目です。

（２）大正大学における TA 制度

二つ目は、私が大正大学に来てから 3 年目の平成 17 年度より TA 制度を始めました。TA とは「ティーチングアシスタント」とのことです大学に隣接する豊島区立巢鴨北中学校の当時の校長先生が数学の少人数クラスを始めた先生でした。この年に校長先生と連絡を取り合って、中学校の数学の授業のアシスタントを学生にということが実現しました。翌年度からは小学校にもお願いしまして、多いときに半期で 100 名ぐらいの学生が TA を行っておりまして。最近は、春学期ですと約 70 名前後の学生が支援に行っています。平成 20 年度に人間科学教育人間学専攻を新設しまして、TA 活動を「教育の現場を知る」と科目で単位化しました。本年度教育人間学科 1 年に 70 数名が在籍していますが、そのうち 40 名ほどが TA を経験しています。こういった活動を含め、大学では COC（センターオブコミュニティ）「大学と地域の連携」という文科省の取り組みに応募していました。2 年連続落ちてしまっていますが、その中に、大学と豊島区の課題ということで、生活（福祉）課題、教育課題、振興（町おこし）課題、ということで 3 つの課題を行なおうということで、私どもの学科では、「教育課題」の連携事業として取り組んでいます。小学校課程の受講者のほとんどが TA を経験しています。先ほど申した女子学生のように、TA 先で現役採用されたということもあります。

(3) 卒業生の声をどう受け止めるか

教員養成部会の報告と私どもの経験と卒業生の意見をどのようにまとめようかと思いましたが、次のように卒業生の声を受け止めてみました。

●大学（一般学部）での専門

先ほどの教員養成部会の報告にもありましたように、小学校課程だけでは不十分かもしれない高い専門的な力量、知識を持つことができる。しかし、卒業生に聞いてみますと、なかなか専門性と言いましても、例えば「私は、日本史を専門でやりました。」と言っても歴史の全体が詳しいということは無くて「自分は江戸時代のこれこれをやりました」ということになってしまいます。ただ、先ほども言いましたように、一部の所について詳しいということは子どもの興味関心を引き出す上で良い話でもあります。「卒論で扱った」などの特定の分野については得意ということで、教科全体についてのところにはどうなのだ、と疑問もありますが。それは、もちろん大学の学科、教職課程での一般的包括的な科目の在り方も絡むのですが、本来ですと大学として教員を養成しているのだということから言いますと、何年もこれは答申でも批判されているところなのです。ただ、なかなか歴史学科の先生方に、そこそこにやるとお願いするということは難しく悩ましいところです。それから 3 つ目は先ほどもありました、中学校の免許を取得のために中学校あるいは高校で教育実習をしてから小学校で実習することで、小中一貫で見ることが可能になっています。小学校教員として中学校の教育へ注文をもてるようになってきていると、それも非常に重要なことだと思います。

それから、歴史学科の学生が教員志望者以外の学生との交流ができているということでもいろいろな人と付き合うといことで大事なかなと思います。

●大学（教育学系）での専門

教育心理学、特別支援教育、教師としての心構えや TA の経験などで現場のことを意識してできたかと思います。ただ、社会、国語の地歴や公民の免許を取ったからと言って、教科全体の専門性ということではやはり弱いところがあります。ただ、一般学部で取得した学生と同様に、中学校や高校の免許を取得のために中学校、高校で教育実習をしたことで、小学校でも中学校での課程を意識して授業をすることができたということで、これも大変良いことだと思います。

●学生の負担

辞退の数字が多かったということですが、学生のいろいろな面での負担です。もちろん「大学としての指導體制」にも関わってきますし、安易に受講させた私どもの責任もあるのですが、その一方で、通常の卒業単位に小学校の単位とそれに加えて TA が単位に（あるいは活動として）入っていますので、どっちつかずになってしまっていて非常に負担になり、本来取得すべき中学校の免許取得も出来なかった、という話もあります。よくも悪くも、採用選考を

受かるためには TA が必修のような意識が出来上がってしまっています。こういったところで学生の負担が非常に大きくなっている、という現実があります。

また、近年、TA 先の現職の校長先生が個別指導（論文・面接・集団面接）を非常に熱心に取り組んでいただけているということが増えております。あるいはその学校の校内研修に TA の学生を参加させていただけるとか、TA の学生を通して私たち大学の指導教員も校内研修の受講者として参加させていただくということも結構増えてきています。

●大学としての指導体制

森山先生の最初のご紹介からは、学生（小学校免許取得）に対しても指導をしているという紹介をいただいてしまいましたが、実際は、小学校免許に関しては、ほぼ丸投げになってしまっていました。レポート提出に関してもこちらで確認するということはありませんで、通信の学生に対してサポートができないことが一番の反省になってしまいました。

今日、このような機会に見直し反省できましたので、今後ともご指導いただきながらやっていきたいと思います。どうかよろしく願いいたします。

高橋：滝沢先生ありがとうございました。では、続いて、原田先生、お願いします。

原田：よろしく申し上げます。いま滝沢先生から発表をいただきましたが、私も今までどんな指導をしたのかな、学生をどのように支えてきたのかなと振り返りながら、本学と重なりあうところと、逆に本学ならではのところもあるのだと思いました。今回は特に小免についてお話ししようかと思いますが、特に本学の中では受講者が少ないということもあるせいか、学生に対して非常に細やかに関わって指導しておりますので、その点を中心に発表させていただきたいと思います。

1 本学教職課程の体制

まず、本学は総合情報学部というところで 124 単位卒業単位をとって、教職課程ということでは 69 単位とるというかたちになります。小学校免許を取得する場合はそれに 20 単位プラスしてとるということで相当数、負担が大きいということになります。教職課程の教員が 4 名おります。特免教授といわれる方が 3 名、専任といわれるかたちで私が（1 名）計 4 名います。でするので、特に今回のこの養成特別プログラムの通信については、私の方で指導するということが共通認識になっております。

本学は学生のレベルということになりますと恥ずかしくて非常に優秀とは言い難く、小学校から高校までの学生時代に挫折感を味わうとか、あるいは学習に関しては、得意な分野が特別に良いということがあることはありませんので、伸び白などに期待して 4 年間教育するということが本学の教員の中で共通した取組のベースとなっています。合言葉として「30 歳までに教員になろう」「30 歳になるまでにしっかりと教育を知ろう」ということで伸びしろ幅に期待をすることが重視されています。ということで 4 年間の中では、学生の伸びしろ幅に期待をして、

学生には負担は与えるだろうけれどもスキルの向上を目指すために専門性だけではなく人間的な教育もしていこうというところがあります。

そういうところから、本学には今年から「通過審査」というものを設けております。本学の場合は、前期からすでに教職課程の科目を履修させています。「教育学概論」、そして今期に森山先生にもご担当していただいている「教職課程編成論」こちらの方が入ってきております。

1年生の通過審査の一つ目として1年生の段階で作文を書くということで、モチベーションを維持するために「自分が学んで来たことを振り返ろう」ということ「今後教職を学ぶにあたって自分は何が足りないのか」ということの作文課題が入ってきております。それから二つ目として、前期後期で受講した教職科目を試験というかたちでペーパーテストを実施しております。今回も森山先生に試験内容としてどういうかたちがよろしいでしょうかということを確認させていただいております。

2年生は通過審査としてはITパスポートの取得があります。本学は1年生、2年生は情報しか免許が取れないということがありますので、「情報のプロパになろう」ということでITパスポートは最低限とりなさいというかたちで3年生の3月までに取得しないと教育実習に出さないということをおこなっております。そして、同時に道德の模擬授業というのを行っております。これは、道德授業論というのが2年生の後期にありますので、千葉県の教員採用試験2次と同じで7分間というのを実際に模擬授業させています。これは中身を問うというよりは、どちらかというところ「人前で発表できるか」とか「緊張や不安があるのだけど堂々としてできるのか」とかそういったことを見ていくというかたちをとっています。そして、同時に2年生まででとっている教職科目の試験をペーパーですということ、千葉県の過去3年間の過去問（採用試験の）を中心に問題を出すということになります。

3年生になりますと専門科目の主免となります。主免の模擬授業を50分ということをおこなっております。一応、この通過審査を通過しないと教育実習には出さないということになっております。

1年生、2年生、3年生、全員が通過審査を受けることを通して、やはり、その学年に対応した力がついてないと思う場合には、3月の最終週に補講するということになっております。つまり、学生の方には（通過審査は）教育実習に行かせないようにして、教職課程を落とすための試験ではなくて、あくまでも該当学年時の上がるべき力（進級するべき力）がついているかどうかを確認するためのものであるから、それが保障されてない場合には補講をしますということで3月の最終週の月曜日からおこないます。例えば、模擬授業であれば、毎日、模擬授業の補講をおこなうということになっております。

このために、どういった課程の年間の教育体系を組んでいるかということ、1年生の段階からすでに前期授業が始まっていますが、4月にしっかりガイダンスをおこなって、教職課程に対する履修の取り方や手続きの説明をしています。同時に7月の段階で前期の授業がありますので、4名（教員）いますので、4名でそれぞれ担当学年を決めて、面接を全員とおこなっております。私が専任ということで3年を担当するようになっております。なぜ3年生を専任がやるかという

のは、3年生のこの時期に、教員志望者をふるいにかけて一貫した指導をおこない始めるからです。ここから教員になりたいという学生は、教員採用試験にむけて、ないしは、教員になるための資質向上ということで一本釣りというかたちで個別にかなりアプローチをかけていきます。それ以外のところで、特任教授の先生方には1年生、2年生、4年生をそれぞれ担当していただき6月、7月には個人面接が終了するというかたちをとっています。

以降、本学で特徴立てていることが、1年生の11月に小学校の参観に行っております。特にこの小学校（千城台北小学校）は、全国に珍しい単級に対して特別支援学校が8クラスあるという学校です。ということで特別支援の様子も丁寧に参観できるということも分かりますし、実はここは半分の先生が若手教員と言われる先生でいらっしゃいますので、だからこちらに参観に行かせていただいているということもあります。

そして、2年目になりますと、特別支援学校の病弱学級に参観に行きます。これは、何がねらいかといいますと、病弱学級でありますので情報教育に非常に長けている学校でありますので、情報学を本学が専門としておりますので、どういった情報教育をしているかということをお勉強します。これは、教科に関わらず勉強になりますので、それを見るということが一つのねらいになります。病弱のネフローゼとかあるいは白血病だという子どもたちが、これまでは学校に復帰する子が少なかったのですが、治療が良くなったということから、学校に戻るという子ども達が増えています。それと、発達障害の子が入っているというところで、先生方がどのように取り組んでいるのか、しかも、幼稚園から高等学校までありますので、職業教育まで含めたということを見ようということで、そういったねらいのところで参観をさせていただいています。ちょうどその頃、介護体験ということで、特別支援学校の参観がありますので、非常に勉強になるようです。

その上で、中学校の方に情報の授業を参観に行かせてもらっています。これは、技術の時間にやっておりますので、情報の免許を取得する学生からすると中学校でどのような授業をやっているのかということで、非常につながりのある場面になっているようです。

そして、それ以外にも発達ということで授業校内を見させていただきますので、中高というところの「移行」というところも含めて、校長ないし担当していただく先生方に講話をいただきますので、「移行教育」というところでも、非常に勉強になるということになります。

3年生になりますと高校の授業を見に行かせていただきます。ここで、情報の授業を持っている学生が実際に授業をさせていただきます。6回から年によっては多い時で10回ぐらい事前に高校の先生が大学へ来てくださって、指導案の指導をしていただき、実際に授業をするところまでつなげてくださいます。

ということで、教育実習へ行くまえのリハーサルを兼ねることが、特に情報の学生はできるというかたちになっています。今年は二進法のところをやりました。そうすると、3年生は、教育実習に行く前の同期の学生が実際に教壇に立っているところを見ることで、自分自身に置き換えて、自分に足りないところはどこか、学生を通して、自分がそこに置かれたら何をすべきかなどを実際に考えさせられる所があるということで、非常に効果的な授業参観、模擬授業になっていると思います。

ということで、本学として特性的にやっていることが小学校、中学校、高等学校、特別支援学校にも授業参観をするということをやっているということです。それから、特に2年生の5月に「高校SSV」というかたちで、千葉県の教育推進校へ学習支援へ行きます。「高校SSV」とは中学校で一部授業の取りこぼしがあった生徒さんを高校1年生で保障するという推進校に、サポートボランティアというかたちで入る取り組みです。

つまり就学の保障をする勉強をしている学校に対して、学生がボランティアで入るということをして2年生が全員入るかたちをとっています。ですので、すでに1年生ないし2年生で小学校、中学校高校を観る、あるいはボランティアに入る。以降、3年生、4年生でも教育実習に向けてというところで、繋がりを持った教育体系をしていこうというかたちで、本学としては、全校種を見せるということをやっています。

そのため、非常に小学校の教員になりたいとか、自分の取得していない特別支援の教員になりたいとかという学生がいます。ですので、卒業後に自らお金を払って、通信でとか、学び直しをしてとか、あるいは臨任でとかといった採用があるという学生が非常に多いという実態があるということをご理解いただければと思います。

2 取得可能免許に関して

現3年生、4年生までは旧学科というかたちになります。4学科あります。総合情報学部の下に環境情報学科・情報システム学科がり、中学校数学と高校情報、数学が取得できる。情報ビジネス学科では、中学校社会、高校情報、商業、公民が取得できる。情報文化学科では、中学校社会、高校情報、公民が取得できます。そして、平成25年度以降に入学した、1年生、2年生は総合情報学科で高校の情報しか取得できないということになっています。ですから、今回発表させていただきます。小学校教員養成プログラム玉川大学様と契約させていただいているところでいうと旧学科の3年生、4年生が対象になるということになります。

3 在学生と進路（3年間）〈平成27年2月現在〉

今年度（平成26年度）は13名が取得見込みです。毎年1年生の段階で50名程度希望があります。ところが1年生で厳しい個人面接で指導していきますので、大体10名から15名くらい落ちていきます。そして、2年生でやはり10名くらい落ちていくということで、大体毎年20名前後が残っていくということになっています。

ただ今年度に関しては、情報系企業が非常に就職の採用が良いということがありまして、2年生や3年生の段階で、すでに「教職はいいです」ということが多かったです。ということで教員希望者が近年稀にみないくらい非常に少なかった年になります。そういった中で、5名の者が教員を希望してしまして、うち2名が大学院進学を希望者、そして、成田市になりますが補欠合格で、ただいま採用を待っている状況です。それから非常勤講師採用待ち2名というかたちになっています。昨年度は18名の免許取得者のうち7名が専任ないし非常勤で教員になっています。

本学の特徴というのは、卒業生が非常勤講師を経てから正式採用されるということが毎年 2、3 名いるという傾向があります。去年のことを言いますと、埼玉県、千葉県で、あるいは私立で 5 名採用となっています。その前の年（平成 24 年度）になりますと 22 名中、9 名が教員を希望して、全員、非常勤や専任を含めて教員になっているということになります。本学は 20 名ぐらい希望するうち半数、あるいは教員免許をとったうちの半数が教員養成をしてほぼ全員が非常勤ないし、専任になるというかたちで進路を決めているというかたちになっています。

4 小学校教員養成特別プログラム受講者数

(1) 受講者数

小学校教員養成特別プログラムというのが平成 23 年からスタートしております。平成 24 年に卒業ということです。平成 23 年度受講者は 2 名おりました、1 名は離脱して、1 名はまだ継続中です。この卒業生については、現在成田市の中学校で採用になっています。本人に話を聞くと、残り 1 科目ですが業務が多いということで、なかなか勉強が追い付かないという状況だそうです。あと 1 科目なのでやれるのではないかと思うのですが、やはり、なかなか余裕がないということが現実の状況のようです。

それから、平成 24 年度からスタートした学生は 4 名いました。うち 2 名が終了して、うち 2 名が離脱しました。離脱した者については、やはり、本学の免許との兼ね合いのところなかなかうまくいかないということで、途中で離脱したということになります。取得をした 2 名については、在学中に取得して、横浜市の教員に採用されております。もう 1 名は卒業と同時に成田市の中学校に採用になりまして、採用された段階で勉強して取得しまして、今年千葉県の小学校に専任で採用になりました。

平成 25 年度は希望が 0 だったので、平成 25 年卒業生も 0 ということになります。今年度 26 年度からスタートした学生が 1 名いるということになります。

(2) 受講者の基準

成績を GPA2.0 以上としています。この数字は低いのですが、本学の学生の伸びしろ幅に期待したいということで、面接の中で特に「意欲」「動機づけ」で高い者をとっていきます。そして計画表も出させています。どのように計画性をもって受講していくかということを見ています。そのうえで受講をさせています。それでも本学は中高の教員の希望が少ない中でも多い中で、情報を希望すると非常勤で 100%就職できます。数学の情報に関しましては、場所が場所なだけに、競争校がないため、ほぼ希望すれば就職できるということを学生たちも先輩たちから聞いておりますので、そんなに無理して小学校免許をとらなくてもという所を正直もっています。実は、玉川の募集をかけた後に個別で面接をして、「君は可能性としては小学校の免許をとった方がいいのではないか」という声かけをたくさんしているのですが今の 4 年生はゼロだったということです。そして、いまの 3 年生も声をかけて「1 年間頑張ってみよう」ということでやっとな受講者がいたということです。

やはり、情報や数学の非常勤が 100%だということがありますので、あまり基準を厳しくもうけてしまうと、やる気がそこから落ちてしまうということで、幅をひろげるということで、その基準になっているという背景があります。

(3) 本学教職課程におけるプログラム受講者への教育体制

①受講が決まってからのガイダンス（面接）

本学の場合は、本学でも免許をとっている 124 単位にプラスをして、小学校の免許取得になりますので、サポートしないと、とてもでないですが取得できないというのが正直なところです。

そこで、本学教職課程におけるプログラム受講者への教育体制というのをがっちりしています。そんなところで、私自身が担当していたのですが、まずは受講する事が決まったら、学生を呼び面接をします。そして、実際にこの受講者を選抜する面接の段階でも、これ以降プログラム受講することが決まったら、担当の教員と共に二人三脚でやっていくので、呼び出したり声をかけたりしたときに、2 か月に 1 回の面接を受けてもらうことを条件とすることを最初に告げます。そして早速、受講がきまったら面接します。モチベーションを確認します。最初は、決まったということで意欲が高いので、高すぎることを含めて、ほどほどになるように、ある意味、先の見通しをもたせて大変な状況になるので、そのモチベーションを維持して欲しいということを伝えます。その上で、取得までの計画表を作成させます。初めは、かなり頑張った計画表を出してくるので、何度も修正させます。それを何度も繰り返します。

そして、その中でレポートの書き方も指導をします。引用文献の探し方、あるいは、書き方、読み込み方、それらを全部指導していきます。そして、大学の授業との兼ね合い、そして卒論との兼ね合いもサポートしていきます。

例えば指導教官によっては卒論と教職課程は別だという先生もいらっしゃいます。卒論は卒論でやってもらわなければいけないから教職課程をとっているからと言って特別ではないという先生も正直いらっしゃいます。ですから、学生がそこでくじけないようにするとか、先生とのやりとりの中で学生と先生の関係がうまくいくよう、こちらで間に入って、学生との橋渡しをすることも含めて、学生にもそれを伝えるということを面接の段階でおこなっています。

そして卒論についても出来る限り「教育学」ないし、「自分自身の進みたい方向と近いもの」をやりなさいということを 2 年生の後期で指導を始めます。本学は、3 年生からゼミを選びますので、そういうことを考えてゼミを考えなさいという指導もしています。

そして、1 週間ないし、1 ヶ月のスケジュール確認というのをします。その上でそれ以降随時面接があるので確認をしていきたいと思いますということを言います。そして、報告・連絡・相談のやり取りを必ずしましょうということをここで確認し、連絡先をこのタイミングで確保します。そうでないと、教育学部とかゼミの学生ではありませんので、このタイミングを逃すと連絡が急にとれなくなるということになりますので確認します。

②ゼミの指導教官への理解とお願い、学生との橋渡し

学生がとったゼミの指導教官の所に個別に挨拶に行っています。つまり、プラスアルファで学生が小学校の免許を取得するということが、非常に大変な時間を必要とするということと、ねぎらってほしいことをお願いするということが、やはり、理解のある先生と残念ながらゼミの活動や卒論をやってもらうのが当たり前で、不平等な扱いはできない、特別な扱いはできないという先生がいらっしゃいます。こちらは、ある意味そのような先生の情報をもったうえで学生にアドバイスができるので、挨拶に行くことは意味のあることだと思います。

③計画的に勉強が進んでいるかのチェック

授業時、学内で会ったとき、連絡が不通だった時にメールを入れる等
実際どういう時にするかという、実際私が担当している授業内で個別に呼んで5分10分声をかけるとか、学内で会った時にも声をかける、励ますとか、あるいは、連絡が不通の時には、「元気ですか？」あるいは、「会える時間ありますか？」などのメールをいれて連絡をとるようにしています。

あとは、教職課程の教員等、委員会で情報を提供させていただきますので、とっている授業の時には、その学生に対して声をかけてほしいとか、その学生と連絡がとれていないのでもし連絡がとれるようであれば、連絡するようにお願いするというかたちをとっています。その上で、面接の中で勉強の内容について、どこまで進んでいますか？とかレポートの進行度や実際スクーリングへ行った時はどうでしたか？とかの確認をとるようにしています。

④勉強場所としてのゼミ室の利用の保障

学生によっては、ゼミ室で勉強ができないとか、あるいは実際に教材具が無いということもありますので、わたくし自身のゼミ室を使ってよいということにしています。そういう時は、なるべく私も声をかけるようにして、どこまで進んでいるのかとか、レポートを書いているときには赤をいれるとか、細目にチェックするようにしています。

⑤レポート指導

かなりレポート指導は丁寧に行っています。学生の方が心配不安ということが多くあるようで、学生がレポート提出の前に見せに来ることが多いです。やはり、そこで持って来ない学生が、途中でリタイヤします。そのような学生は、声をかけても「大丈夫です。大丈夫です」と言ってつながりが切れて（リタイヤして）いくことが実状です。

⑥2ヵ月に1回の面接

⑦目標をもたせるべきおしゃべり（ストレス解消をかねて）

2ヵ月に1回の面接をすることで、目標を持たせるべきおしゃべりをストレス解消もかねてやっています。教職課程の学生の中でも一人単位が多く取らなければいけないとか、あるいは生活の中でやっていくバランスが保てないというところがあるようなので、こういうことも含めて面

接の中ではやっていくようにしています。

⑧教職課程教職員のサポート体制

私自身も教職課程以外の学科のゼミ生も担当していますので、たつぷりと時間をとって指導することができないことがあります。教職課程の教職員にサポートをお願いしています。本学は特に事務職員が非常に協力的です。例えば玉川大学さんの書類を出す関係で事務職員さんと話をする場合も、事務職員さんが「頑張ってるか?」とか「頑張っている様子を聞いてるよ」というような声掛けを必ず学生にしてもらうことをお願いしていて、とてもそれを心よくやっていただいています。学生の近況報告を互いに連絡し合っているところもあります。ですから、授業の中で取りこぼされているところが出てきているということになると、やはり頑張りすぎているということになりますので、すぐに面接で計画を修正させるということをやっています。

あとは、レポート課題の添削ということで、私が間に合わないときは、他の先生が助けてくださるといった環境が整っていました。

そして、小学校の教育実習先の保障ということで、これについては、特任教授の先生が直ぐに教育委員会に動いてくださって、そして、特に広い気持ちで受け入れてくださる校長先生をセレクトしてくださって、すぐにみなさんが動いてくださいました専任担当は私一人なのですが、体制としては先生方にご協力をいただくことで、非常に安心してできる体制だったと思います。学生もよく言うのですが、先生方が繋がっていて、どの先生も自分の情報を知っているから裏で何もできないということでは下手なことはできないと言ってくれていました。うらをかえせば、どの先生も目をかけてくれるということが学生に伝わっているのだなと感じています。

<課題>

課題だと思ったのは、特に指導教官つまりゼミの先生のご理解が無い時の学生の支援です。どうしても後半になってくると学生によっては、小学校の教員になると言っていたある学生のゼミの担当の先生が「卒論に力が入ってなくて、卒論の評価ができない」と言う先生がいました。学生本人にとってみると、卒論は大事だと自分でもわかっているけれども、在学中に何としてでも単位を取りたいと思うと、どうしてもどこかで優先順位をつけなければいけない中では、卒論をパーフェクトにするという指導教官の願いに叶ったというような対応はできない。ゼミ合宿もスクーリングの関係で欠席しなければならない、ゼミの時間もなかなか参加できないということで非常に厳しい評価をもらっている。学生も言っているし、その学生の友達が見るに見かねて非常に厳しい評価および対応をゼミの先生からもらっていると伝えてくる。そういったところで学生とゼミの先生の関係でというところで、学生生活に対するモチベーションがちょっと低くなったところがあったので、今後の課題というところは学生のモチベーションの域というのは小学校プログラムだけではなくて、全般を通してモチベーションをバランスよく維持させていってあげるということが非常に大事だと思っています。卒論の手を抜くということは本末転倒になりますので、本学の課題というところでいいますと、こういったプログラムを大学として理解していただ

くということが一つ大きな課題かと思えます。

それからもう一つは、本学の学生自体の学力と文章力ということも大きい問題です。やはりレポート指導というところで本当にお恥ずかしい「てにをは」まで丁寧に指導しなければいけないということがあります。最初にレポートを指導した時には、私が書いたレポートになってしまったのではないかと正直心配してしまうような内容だったのです。ですので、文章力という所が大きい課題があったということで、反省を踏まえて、実は今年度の1年生から「文章とレポート作法」という一般の授業だったところを教職の学生の必修登録にしてもらって、一般の学生と分けて教職の学生だけが受ける授業にってもらって、教職担当の先生が授業をして、それ自体が通過審査になったので、それは一つ大きい成果になっているかと思っています。なので、学力と文章力というところは、どのようにしていったらよいかという検討課題になっています。

それから受講させる基準で、これまでは、意欲、関心、伸び白幅とありましたが、やはりそれでも落ちていく学生がいるということを考えると基準を設けなければいけないかと思っています。ただし基準を設けると本学、学力が厳しいので、GPAではなくてどこでみていくのかということも含めてみていくことが大切だと考えており、これも検討課題になっています。

それから、やはりこういったプログラムをやるうえでは、学生にまかせっきりというのは大学として無責任だと思っています。ですので、そういう意味でいうと、教員自身がどういう指導体制でやっていくかということや指導時間の確保ということが重要になってくるかと思っています。私、自身のことを言いますと、教職課程以外に学科の担当になっていて、ゼミ生を16名もっているという限界があります。

大学として、来年以降教職課程の専任でやっていくことを検討するというかたちになっているので、これも一つ課題としては繋がったということで大学が受け入れてくださった、というところがあると思います。指導時間をきちんと確保するということは大学として本当に大事なことではないかと思っています。

そして、本学は、最初に掲げさせていただいた、「30歳までに教員になろう」ということであると、実は、この2年生は情報の免許しかないということもあるのですが、教職大学院がないかわりに「専修免許状をとろう」ということで本当に教員になりたい人は大学院に行きなさいという指導を始めています。

そうなってくると免許を取得するということになると、中高の免許をとりながら、小学校の力も考えていくということや、大学院までつなげて行きながら幅広く勉強をしていくということで、一つ何か今後本学で教育していくということでのプログラムができてくるのではないかと、これからどんどん課題になっていくのではないかと思っています。

5 免許取得学生に対するインタビュー調査

実施日：平成 27 年 2 月 14 日 1 人 30 分（電話インタビュー）

実施対象者： 小学校教員養成特別プログラム修了者

A：横浜市小学校非常勤講師

（在学中に小学校免許を取得）

B：成田市少人数推進教員（平成 27 年 4 月より千葉県小学校採用）

（卒業後に単位をとって小学校免許を取得）

（1）プログラム受講のきっかけ

A 教師になりたい、中高以外に小学校もとれるため選択肢が広がる

B 中高教員希望、小学校も気になって勉強したいという軽い気持ち

⇒共通して言えることはどちらも最初から小学校に教員を目指してないということ。

（2）本学の単位取得との兼ね合い

① どのようなスケジュールを組んで勉強したか

A 2 年生までに単位を 80 単位取得し、3・4 年生は小学校免許取得の勉強にあてた計画を立てる 例)1 ヶ月に 2 枚のレポート→試験

通学中にテキストを読む

時間的ロスがないようにレポート提出後は、次の科目の学習を進めた

B 2 年生までに単位を 80 単位以上取得し、ゼミが経済の先生だったが許可を得て、原田先生が担当になって卒論のテーマを「高校の教員の道徳の授業の意識～道徳の意識の実態調査」ということをおこなって教育学に関連させた。

土日に集中して勉強をし、授業に影響しないようにした

授業内で理解できるよう集中した

自分の時間（たとえば、バイト、遊び、サッカーサークル）をけずった

レポートを送っている間に、他の教科を行う

⇒本学では 2 年生の段階になった時に玉川での小学校のプログラムがあるということを紹介しているので、この学生たちは興味を持ち、「なるべく単位をたくさんとっておこう」という意識をもったといことで 2 人とも 3 年生、4 年生の時に勉強ができる体制をつくっていた。取得できなかった学生に関しては、やはり単位を 80 単位もとっていなかった。ということで、この差は大きいこと。

2 人とも間を開けずにレポートに取り組んだということが共通している。

② 勉強における苦勞

A 科目によるが、レポート課題ができて試験範囲が広すぎて試験勉強が追いつかない。レポート課題が終わってから、試験までの期間が開いてしまって、試験までに他の科目課題をやると試験内容の学習が頭から抜けてしまうことがあり試験を受けることに非常

に緊張感があった。

B 受講者が少ないため、レポートや大変さを共有するといった話ができにくかった。スクーリングで仲良くなる人はいても友人はできなかった。つまり愚痴を言い合うという大変さを共有するという仲間がいなかったことが辛かった。

③ スクーリングとレポートについて

A スクーリングに行かないと在学中に取得できなかった。金銭が影響し、むしろスクーリングで取得した方が試験は負担が少なかった。

3年夏2科目、冬2科目、土日スクーリング1科目、春1科目、4年夏1科目

試験は全て1回で合格した。(うち一回は名古屋にも行った。)

通過で非常に苦勞したレポートが「教育課程編成論」：担当者が2名代わり、3名の指摘がそれぞれ異なりレポート作成が非常に困難で、「なにをやっても自分はダメだ」と途中で何度も投げ出したくなった

B 3年夏2科目 春1科目；4年土日スクーリング2科目、春1科目

「教育課程編成論」：担当者が途中で1名代わり指摘が異なったのでレポート作成にてこずった。そのおかげでわからないことを深めることができ、身になった
⇒「教育課程編成論」は、A.B他に現在非常勤を行っているあと1科目で取得の学生も難しいと言っている。共通して3名が言っていることは、戻ってきたレポートを書いている最中に担当者が変わっていて再提出すると指摘されていることがかわってしまい何をどう書いてよいか分からなかった。こちらが指導の様子を全く認識できなかったので玉川大学との連携が大事だったのではないかと思う。

(3) プログラムを通して何を得たか

A 最後までやり通すこと、達成感、仕事をやるうえでの自信になっている。

仕事でも文章を書くことが非常に多いのでレポートの書き方が身につけて非常に活かされている。

B このプログラムを通して教員としてやっていこうという強い信念ができ、特に3年生の終わりにかけて中高の教員ではなく小学校の教員になろうという強い意志もてた。小学校の教員になるためにもその先に中高にどのように成長を生徒がしていくかという視点から教育実習ができ、学びが全部つながっていたということが今だからこそわかる。そういう小学校の教員をやりたいということで自分の勉強不足を痛感して勉強への意欲が高まった。そのうえで、計画性の力がついた。計画的にやらないと身にならないということで、計画定期に何かを成し遂げる。いろいろなものがある中で、バランスよく優先順位をつけてやるというこの計画性が、今職業で一番生きている。

この二人は専科で本来、本人が学ぶべき中高の免許、獲得して欲しい専門性以上に広くあったのではないかとインタビューから感じた。この二人がプログラムをやることを通して、自分自身の教員としての向き不向きも見えたといっている。中高の免許もとるけれども、向き不向きを通してやっぱり小学校の教員をやっているということが自覚できたことも、このプログラムをやったことの意義だったと言っている。

いま、職業の中で、発達段階ということが見えるようになった。非常勤をやっている中で、この先にこういう成長をするために今ここで何ができるべきか、ということが支援するのに活かしているということです。これは、中高の免許を取得していないとわからないことなので、キーワードとしては「発達課題」「発達支援」ということがみえてくると思いました。

そして、Bの学生がいま職場で「あなたは小中の免許を持っているのにあなたは何をやっているの?」と言われて、頭が真っ白になった。専門性をもっている先生から見ると、Bの学生には専門性がないように見えるかもしれないけど、実は、これ(いろいろな免許)を持っているからこそ自分の専門性ではないかと、持っていることによって得意とするところが浮かびあがってくる、だからいろいろな免許を持っているいろいろな勉強してきたから、今ここで小学校の教員をやりたいということが見えてきているから、活かされているところがあるのではないかと、今なら言えるのではないかとインタビューを通して考え直すことができたと言ってくれました。

以上のことを踏まえて、大学の教育の在り方として、教職課程の教員自身がどのような支援をしていくかということと、それから、卒業後に取得したいという学生に対しての教育ということが凄く大事だと思います。それから実際に落ちていく学生はいると思うがチャンスを与えるということは非常に大事で、挫折につながってしまうかもしれないが、そこは、フォローしていくことも踏まえたら、学生に対して向き不向きを検討させるという意味でとか、専門性を見つめ直す意味でとか、そういうことも含めると、チャンスということで本学の学生にとって、このプログラムは非常に意味のあるものだと思います。

最後に、本学の学生を支えるという意味では、連携先の大学様とも全く情報を交換がゼロではなくて、連携をしていくといくことを通して、本学の教職の教員も勉強させていただきながら、学生を支援していくという体制を持つていく必要があったかと思います。今の段階では学生が一人(プログラム受講の)いますので、実は中高社会と情報と公民と商業と非常に(免許を)取りすぎているのですが小学校も一発で取得するのだと言っていますが、その学生については、「大学院へ行って勉強なさい」と指導しているところです。そういった関連から、これから何ができるかと改めて今日のことを踏まえて、もう一度検討していきたいと思っています。以上とりとめのないことですが、発表を終わらせていただきたいと思っています。ありがとうございました。

高橋:先生方ありがとうございました。お話しをいただいて本大学も反省すべき点があるなど反省したわけですが、お二人の発表を聞いて、大変熱心にご指導頂いていることがわかり、本学も

参考にさせて頂きたい部分が多くあると思いました。ありがとうございました。

【質疑応答】

高橋：それでは、質疑応答の時間とさせていただきます。

ご質問のある方は挙手をお願い致します。

みなさんから質問がないようでしたら、お二人に私から一つずつ質問させていただければと思います。滝沢先生からで、TAを単位化されているということでしたが、本学では、授業の兼ね合いが難しく、(ボランティアへ)行ける人は行きなさいというような指導が現状です。大正大学ではどのように授業との調整をして、TAを単位化とされているのでしょうか。

滝沢：単位化する前から、大学の隣の中学校の数学の時間にTAとして入っていたのです。学校の方から時間割をいただいて、例えば、火曜日の2時間目には2年生の1組と2組の合同の授業(2クラスを習熟度別に3クラスに再編)があるので来てください、というような要請があります。その時間割に合わせて大学の授業の空き時間などに学生を週1回行かせていて、そこからTAが始まったのです。中学校の場合はいいのですが、小学校の方になると、朝登校の所から一緒にやってほしいということが、小学校側にも私の方にもあったので、単位化をしてからは、小学校へ行きたいという学生が多かったので、学科の1年生向けの科目は水曜日には入れない、ということをやっています。ですから、近くの学校や母校などのTAをそこへ(水曜日)入れていきます。2年生以降になるとそれがなかなか難しいのですが、あと、うちの学科以外の学生で2年生から教職を取り始める学生がいるのですが、私が教職課程の授業の段階で言うわけですよ、2年生の秋学期くらいから行きたいと、そうするとそのような学生と話す中で、なんとかこの日の午後空けられないかとか、午前中空かないのか、という話をします。なかなか難しい学生には、隣の中学校の数学に入るとか、他の中学校の放課後の個別指導に入るとか、そういった調整をしているわけです。ということで、なかなか一般の単位を取ろうとする学生には少し難しいことですので、ですから1年生の秋学期になると、出向く学生の人数が減ってしまって、春学期に70何人入学して来て、40人から多い時は50人になるのですが、秋学期以降は半分くらいになってしまいます。

高橋：わかりました。ありがとうございました。先生のところのようにボランティア先がお隣にないものなので、大学の授業を午前あるいは午後を全部開けるようにしないと、なかなか週に一回ボランティアすることはできないですね。そのへんは教学が授業の時間割を組んでいるので、相談してやっていかなければいけないところだと思います。今回その意見を伺いましたのでそれを含めて考えていきたいと思っております。それでは、原田先生のところでは、授業に出やすくされていることがよくよく理解することができました。原田先生のような方が大学に何人かいれば、大変充実した教員養成ができるのではないかと思います。お伺いしたいのは、学生が様々なことに主体的に行動するという事は、大変重要なことだと思いますが、学生の自主性を植え

付けるというところでは、何か具体的なことをされていますでしょうか。

原田：そうですね。「褒めて伸ばす」ということをやるようにしています。計画を立てる時も本人が計画してきたもので、やはりできることは尊重するというので、やらせるということで実感させる。ただどもやり過ぎるとか頑張り過ぎるとか、できるのにそこまでやらないという子、予防策を張る子がいるので、そういう子には、どうなのかと投げかけをして考えさせるという、そのために面接を行っているというかたちですね。

高橋：ありがとうございました。原田先生のところでは2ヵ月に一回面接をやられているということですが、学生はやってきますか。

原田：はい、2ヵ月に1回以上来ます。学生の方が勝手に、、、勝手にという変な言い方ですが、最初に2、3回呼んで面接をして、怒られるのではないと学生がわかると来るようになります。例えば、ある学生によると、一人で悶々としていて、どっかで吐きたいけれど誰かに知られるのは嫌だと思っている時に、私のところで話す分には、漏れないし聞いてくれると、あるいは、勉強する中で、自分で目標をたてても先が見えなくて不安であるとかという時に、継続して指導してきているので私のところに頼れば何とかなるかとか、そのような関係性があると、2ヵ月に1回と設定しているよりも早く、本人の方から事前にアポイントを取ってくるがあるので、学生によってはもっと間が狭くなります。

高橋：原田先生は先ほど、各学年に担当があるとおっしゃっていましたが、先生は3年生の担当と伺ったのですが、担当の学年以外の面接も先生が対応されるのでしょうか？

原田：1年生、2年生、3年生の参観実習の引率は全部、私がおこなうのです。なので、わたくし自身の授業はとっていないなくても、ガイダンスから始まって主要な会は全部私が出ますので、私の顔は全学生が分かるみたいです。さらに通過審査のガイダンスや試験は私がやるので、私の方でも、ほぼ2年生の段階で、学生の名前と顔が全員一致します。

高橋：先生のゼミ生の授業というのは、教職とは関係ないですね。

原田：まったく関係ないです。

高橋：ゼミの中に教職の学生は何人いるのですか？

原田：教職の学生は、いま、6名います。

高橋：なるほど、では、10名は全く教職とは関係のない学生たちなのですね。

原田：はい、全く関係なくて、心理学をやっています。

高橋：滝沢先生のゼミの学生は、教職とは関係ないのですか？それともほぼ教職ですか？

滝沢：ほぼ教職です。ただ、3年生になった時に、辞めた者もいますし、今度4年生になる者は9名中6名が教職です。

原田：おそらく本校は教職の人数が少ないので、先ほど言ったように学年が上がっていくたびに人数が20名くらい減っていきます。1年生前期は50名くらいいるのですが、すでにこの後期になって人数がすこっと減っているのです。

高橋：100名くらいですか？

原田：そうですね。100名くらいですね。

高橋：大変ですよ。100名だと。

原田：情報大学は、擦れた子がなくて、かわいいのです。人懐っこい子がすごく多くて、高校までの間に目をかけてもらった子が少ない子が多いのです。どちらかという、端っことか隅っことか外れ地にいた子が多かったので、ちょっと、声をかけると、ピタッと引っついてくるのです。森山先生もわかってくださると思うのですが、その様な学生さんが多いので、授業を教えてなくても来るという感じがあります。ゼミ室はあるのですが教職の子たちに広げているので、人が入ったり出たりしてゼミを越えてみんなが勉強しあっているのです。そこはとても良いことだと思うのですが、私の身体が持たないということが問題です。レポート指導というのは難しいですよ。

高橋：確かにそうですね。通信のシステムを使うところと、レポート課題だけの質の保証という部分で少し課題があるのではないかとされています。いずれにしても、レポートがすごく勉強になったという所があるかと思いますが、文章を書くということが非常に重要だと言われている中で、自分で勉強してレポートを書くということは、ただ授業に出て試験を受けて単位をもらうよりも、よほど自主的に勉強し、実力もつくのではないかとということも、本学で少し意見として出ていることもあります。今日、お二人の先生からお話をもらって、通信も意味のあるものでもあると理解できました。さらに少しお伺いしたいことがあります。お二人の先生方がとても卒業生の情報をよく御存知だと思いました。本学は、卒業させてしまうと、あまり連絡をとらなく

てになってしまうということもあります。卒業生との連絡体制というのは、何か具体的に、卒業後の連絡先を調整する方法とか、大学から定期的に連絡をとるとか、そういった制度はございますか？

滝沢：制度的にはないです。卒業をしてから教職に就いている、講師や非常勤というかたちで頑張っている子達は、個人的に自然に Facebook や LINE でつながっていて情報交換をしています。

原田：情報大学の場合は、卒業生が一斉に情報管理されているのです。その中でも教職の学生は、事務によりピックアップされて就職先まで全部一覧にしているので、何かあるとその学生に連絡できるという関係になっています。就職が決まったという非常勤の学生は、必ず連絡が来ますね。あとは、卒業生が近隣に住んでいるので、学校へよく顔を出してくれるので、誰がどうのこうのと話してくれるので、それをすぐに記録をとって保存しますので、情報が管理されるということになります。あとは、千葉の非常勤などは、大学から学生に紹介しますので、委員会とつながっていきまして、評判も含めて採用試験などの可否の情報は、本人が言わなくても全部流れてきます。

高橋：なるほど、わかりました。お時間もきましたので森山先生の方から最後にお話しをいただきたいと思います。

森山：有意義なお話をいただき本当にありがとうございました。私の方から今日のお話をいただきまして、これから我々が取り組まなければいけない課題も明確になりました。5点ほど感想とこれから取り組むべき課題点についてお話しをまとめさせていただきたいと思います。

一つは、履修のプログラムをやはり再考しなければならないということです。当然、主免の中高の免許が動いていて、その中に小の免許が入るわけです。これは主免の中高の単位と小の単位の合わせではありません。例えば、大正大学の場合は、2年生から小が入るとか、玉川もそうです。原田先生の東京情報大学は3年生から玉川のプログラムを採用しておりますので、このあたりの所が物理的な問題がありますので再考する必要があると思いました。今日、大正大学のプランを伺いまして、やはり、3年間かけた方が良いという面もあるかと思います。でも、まだ明確にされていないという意味でのものを下におろしますと、主免である中高の免許の核としたものの中で位置づけをするという意味では、ここのあたりはどうなのだろうと、ただ一年間たっているからいいだろうと、あるいは先生方からご指摘いただいたように、1年生の成績で評価することはなかなか難しいです。このことについては、原田先生からものすごく明確な東京情報大学の通過審査のプランをご提示いただきました。これだけしっかりしたものをおこなっている大学は少ないのではないかと思います。そういう意味では、私どももやはり通過審査というものを明確にすべきだと思います。私が日頃から思っているのですが、最初食べる時には、まず食べさせると、だけどダメなものはどんどん辞めてもらおうと、やはりその様な仕組みを作らないと、誰でも食べさせて誰でもいいよというわけにはいかない、だけどやっぱり食べさせないと、良いも

悪いもわからない、おいしいとかまずいとか俺の口には合わないとか、その辺の兼ね合いをもう一度この履修プログラムの中での工夫で、しっかり考えていかなければいけないということを、私としては今後の課題として明確になりました。

それから二つ目は、お二人の先生からもございました連携の問題です。大学間の連携を明確にしないといけない。例えば、玉川大学と東京情報大学、あるいは大正大学と明星大学というような2大学間の連携というものがしっかりと確立しないといけないということを理解することができました。他大学間連携が指導体制との関係というところに非常に出てくるというわけです。そこでの指導体制の中から、大学間がどうあるべきか、ということを経、確実に我々としては、明確にしていかなければいけないと思いました。

それから三つ目は、免許取得に関する単位数についてのことです。単位が非常に多いわけですから、その中で中高免を取得して、20数単位をまた加えてとるとということと、当然それぞれの学部での学びがあるわけです。それから今日もお話がありました通り、ゼミとかあるいは部活もあるでしょう。いろいろな大学自体の学びというものが、大学生が成長する非常に大きな過程になっているわけです。そう考えますと、なかなか大学4年間で完結することは非常に難しい面もあるだろうと思います。併有の校種が増えて、小中高とか中高の複数の教科の免許を取得する場合は、やはり、ある程度期間を延ばすということです。今日もお話しに出ていましたが大学院へ進むなどの、4プラス α の所をしっかりと考えて、その中でいわゆる併有の学部にもこれから計画を立てていくことも必要なのかということをお話しと認識をさせていただきました。まさに「質の保証」というところについては、やはり大学にとって、今後の教員養成制度の中で一つの近い存在として我々としては対応しなければいけないということを理解した次第でございます。

それから四つ目は、いわゆる小と中高の校種を越えてという所で、発達という観点が非常に重要だと再認識させていただきました。やはり、近隣の校種を知るということが、まさに教員としての資質能力の向上に相当大きな要素を持っていることを本日再認識させていただいたような気がします。これは、参観実習や何かの方法で、東京情報大学さんも大正大学さんも小学校、中学校へ行けるシステムをきちんとプログラムの中で作って具体化されています。発達と言った観点からも非常に重要な視点をいただいたとっております。

最後になりましたが五つ目です。もしかしたら言い過ぎかもしれませんが、併有に関しては、中高免に対して、少なくとも卒業単位に認めるということが前提になると思います。それぞれの大学が教職課程について、卒業単位に組み込まないと併有の問題が解決していかないです。今のままではとにかく学生は単位ばかり増えてしまいます。教職課程で履修した単位をそれぞれの学部学科が卒業単位に認めるということを前提にしないと、本当の意味でのダブル免とか、あるいは併有の免許についての質の問題が相当出てくるだろうという感じがします。やはり現状は、4年間で一種をとって卒業して教員になるのがほとんどの学生です。まだまだ修士化と言えども、ほとんどの学生が4年生を卒業して、それぞれの大学の学部学科で教職課程の単位を卒業単位に認めるというような形にしない限りにおいては、本当の意味での組織の中での修士化はできな

いのではないか、ということをし少し厳しい言葉かもしれませんが、わたくし自身は、そのように感じたところがありますので付け加えさせていただきました。

本当に先生方、長時間ありがとうございました。そして、今日いただきました貴重なご意見は、今後しっかりと報告書の方で示させていただいて、今後もまた小学校、中高免のいわゆる併有免許で通信の中でも少しでも役立てるようにしていければと思います。それでは、これで終わりにします。ありがとうございました。

資 料

リーダーに求められる、個性や才能を見抜く力、まとめあげる力

10月25日(土)、学校法人玉川学園創立85周年を記念し、昨年に引き続いて「玉川大学 教員養成フォーラム」が開催されました。

「これからの教員に求められる資質能力と今後の教員養成」をテーマに掲げ、本学卒業生である演出家の宮本亜門氏の記念講演をはじめ、各界で活躍されるシンポジストをお迎えしたシンポジウムを行いました。その様子をご紹介します。



当日はおだやかな秋空のもと、会場である玉川学園講堂は遠方から他校の教職員や自治体教育委員会の方々、現役の教育学部生など大勢の参加者で集まりました。フォーラムの開会を告げるのは、本学芸術学部の学生による玉川太鼓の演奏です。赤いたすきをきりりと締めた男子学生15名の力強い演奏に盛大な拍手が送られました。



次に小原芳明学長の開会挨拶へと続きます。「アメリカをはじめとする世界各国で新しい時代に備えた教育の推進、その重要な役割を担う教員のあり方が検討されています。私は中央教育審議会の一員として教員養成の部会を担当しており、21世紀にふさわしい教育とそれを担う教員の養成を課題に掲げて、改革の推進に取り組んでおります。本日は、行政、教育現場、演劇でご活躍の方々をお招きし、それぞれのお立場から忌憚ないご意見をうかがい、皆さまとともに教育を担う教員養成について考えていきたいと思っております」。小原学長はこのように結び、来場者へのメッセージとしました。続いて、演出家・宮本亜門氏の記念講演です。

宮本氏は玉川学園高等部から玉川大学文学部芸術学科演劇専攻科へ進学された、「玉川っ子」です。ご存知のように、ミュージカル、ストレートプレイ、オペラ、歌舞伎などジャンルを越えた演出家として、国内外で幅広い作品を手がけています。講演のテーマは「違うから面白い、違うから素晴らしい」。「玉川へ来るたびに礼拝堂などの景色、遅刻しそうな時の急な坂道など、いろいろなことを思い出し、ほっとします」と、テレビ番組で知られるにこやかな笑顔とユーモアあふれる語り口そのままに講演が始まりました。



宮本亜門氏

宮本氏は東京の新橋演舞場前の喫茶店を営む両親の間に生まれ、元松竹歌劇団ダンサーだった母の影響で幼い頃から歌舞伎座に通い、演劇や音楽、仏像鑑賞など幅広い分野で造詣を深めるきっかけがありました。一方で幼稚園時代に日本舞踊を習い、一般的な男児と異なったことをひどくからかわれて、その後の友人関係が疎遠になる経験をし、ついに高校1年の時には窓もない自室に閉じこもったそうです。10枚のレコードを大音量で繰り返し繰り返し聴き、聴くごとに広がる音楽の世界のきらめきに魅了された宮本氏にお母様は、「学校へ行かなくてもよいが大学病院精神科への通院」を勧めたのです。1年間の引きこもりの日々「誰も自分の話を聞いてくれない」と悩み、「どうしたらいいか、完全に分からなくなっていた」宮本氏の話、精神科の担当医は一切否定をせず受け入れてくれました。これが人生の転機

となり、引きこもり生活で一番きらめいていた音楽の世界から刺激されたイメージを伝えたいと、映画監督や舞台演出家が目標になったのです。その後玉川学園高等部に復学し、明るく迎えた周囲に「自分で自分を責めていた」ことに気づかされたと言います。高等部では演劇部に入り、高等部の部長であった岡田陽先生にも勇気づけられ、ミュージカル「ゴッドスペル」を視聴覚室で上演。当時、研究などで成果を上げた生徒に贈る小原賞を受賞し、「僕は生きていてよかったんだ」と回想します。

演出家として心がけているのは、「オーディションは最初から才能だけに注目して選ぶではありません。人はどう変わっていきけるか、という部分を私が見抜けるか見抜けないかの勝負なんです」。オーディションでの宮本氏はあえて大きな声でふざけたり、アドバイスしながらオーディション参加者の心を解放し、その人が変わる瞬間を見極めます。また一つの舞台を作り上げるリーダーとしては、演出家になったばかりの頃の失敗や海外制作での考え方の違いなど多くの経験から、スタッフの意見に耳を傾け、みんなで話し合いながら作品を作ることの大切さを学んだと言います。

そして、いろいろな才能を育てる学校や教員養成について宮本さんは次のようにまとめました。「普通だったら考えない視点や考え方を、私は『普通なら変わっているかもしれないことが、実は面白く、新たな可能性を秘めている』と舞台演出でも積極的に取り上げています。新たな考え、新たな発想、新たな化学反応が世界で起こっている今、日本からいろいろな才能が学校教育の中で次々と育ててほしいと、心から願っています」。宮本氏の現在のご活躍の土台にあるさまざまな出来事や想いに触れたお話に、会場の参加者から熱い拍手が寄せられました。

今、必要な教育改革とは何か——社会的背景、課題から考える

次は衆議院議員・自民党教育再生実行本部本部長の遠藤利明氏の特別講演です。テーマは「今後の教員養成の方向性」。遠藤氏はご両親をはじめ周囲に教師を職業にする方が多かったことから、政治活動のテーマとして「教育」を取り上げてこられ、2006年には文部科学副大臣を務められています。教職大学院の開設に尽力した際の裏話を披露され、また現在の教育再生実行本部の指揮役として、現在検討あるいは実践に向けた調整の段階にある「成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言」「平成の学制大改革部会」「大学・入試の抜本改革部会」「新入材確保法の制定部会」の提言取り組みの数々についてエピソードを交えてお話くださいました。まとめに小学校5年生の担任教師の思い出にふれ、「先生は私の顔を見て、『なんかいつもと違う。病院へ行ってらっしゃい』と言うのです。まったく自覚症状がなかったのですが、病院で診てもらったら急性腎炎で2か月入院。『先生ってすごいなあ〜』と改めて思いましたね。子供の顔を見て変化に気づくような、そんな先生になっていただきたいし、われわれもそんな先生を養成するシステムを作りたい。」と、述べられました。



遠藤利明氏

次に文部科学省初等中等教育局長の小松親次郎氏による基調講演です。「初等中等教育を担う教員の資質能力と養成大学への期待」として、「これからの学校教育に求められる教員の在り方について」をテーマに、取り組みの状況と今後の展開について述べられました。教育改革が求められる背景には、制度的背景として、教育基本法や学校教育法の改正による心の豊かさが重視される時代にふさわしい教育への転換、社会的背景として、少子高齢化により生産年齢人口が減少していくという問題や、日本の子供の学力は世界トップクラスにある一方で、学習への動機付けや実社会との関連、自己肯定感などの面で様々な課題が見られること、更に、子供の貧困率が



小松親次郎氏

年々悪化し、世界で低くない方であることなどの問題が生じてきていると述べました。

今年7月に教育実行再生会議が報告した第五次提言「今後の学制等の在り方について」では、学制改革とともに、教員の資質能力に関係の深い教員免許制度改革や「チーム学校」という考え方が提唱され、小松氏は「教育の質の中心にあるのは学校の先生であり、注力していただくのは『授業』です」と訴え、その実現には、これまで養成・採用・研修の各段階の接続を重視して見直し、再構築することにより、教職生活全体を通じた職能成長を実現する環境作りを推進してきたことを踏まえながら、教員養成大学の大学毎の強みを生かした機能強化を図り、教職大学院についても全国規模の整備を促進していくことなどが必要であると述べました。また「これからの学校は、開かれた組織を目指す必要があります。校務についても『分担と連携』という意識を深めることが求められます。先生の分担の第一は『授業』であり、学校の管理職や行政の『分担』はその環境整備です。その上で、先生方には学校の内外にわたる『連携』を適切に進めて頂くことが期待されます。」と結びました。

「教師に求められる力量と養成大学への期待」を語るシンポジスト各氏

フォーラムの最後をしめくくるのは、シンポジウム「教師に求められる力量と養成大学への期待」です。田子健氏（東京薬科大学教授）をコーディネーターに、貝ノ瀬滋氏（三鷹市教育委員長・教育再生実行会議委員）、中



田子健氏

島美恵氏（町田市立南大谷小学校主幹教諭）、藤田朋子氏（女優）、そして玉川大学 森山賢一（玉川大学教師教育リサーチセンター長・玉川大学教職大学院教授・教育学部教授）のシンポジストを迎えました。

田子氏から、「先生とのよい思い出」を四氏に尋ねてスタートです。舞台やテレビドラマ等で活躍する藤田氏は、玉川学園高等部に入学し、活動した英語演劇部では顧問の先生が自由に活動させてくれた思い出のエピソードを語り、「生徒のことをきちんと理解しようと努力してくれたり、一つひとつのことを大切に思ってくれる先生は、やはり思い出に残る」と話しました。

貝ノ瀬氏は北海道出身で、「団塊の世代で60人位の学級だったが、担任の先生はよく観察してくれた。とくに小学校5、6年の時の担任は、私が社会科の地図を使い、いろいろな国のことを自分なりに調べて知識を蓄えていたことに気づき、みんなの前で発表させてくれました。そのことで私は自信を持てるようになりました。いい先生、いいリーダーとは、まとめる力と子供の強みを引き出す力を持っていることだろう」と話します。また小学校教員免許取得のために玉川大学通信教育部で学び、「小原國芳先生がご健在で、労作教育の活動をはじめ、言葉だけでなく身をもって示してくれた」とし、新宿駅で通路に落ちている吸い殻を拾って所定の場所に捨てている先生を目撃し感動したエピソードを披露。「私は2人のすばらしい先生に恵まれました」と話しました。



貝ノ瀬滋氏

中島氏は町田市出身で、小学校時代に玉川大学の学生が教育実習に来校したことにふれ、「とても親しく接してくれたことが、自分も教師になってみようかと意識したきっかけだった」と語り、「これから教育実習に行かれる方に、子供たちにとって心に残る存在であり、影響力があると考えて、教育について学んでいただきたい」と話しました。森山（玉川大学）は、教育学部で教鞭を取る立場から、新入学生に「心に残る教師の一言」を書き出してもらおうと、「褒められた」「認められた」言葉と、生徒を「否定する暴言」の二つに分かれるとし、「教育の重要な担い手である教師が発する言葉は、児童・生徒に大きな影響を与えていることを実感しています」としました。



中島美恵氏

子供たちへの影響力の大きい教師とは、『どうせ私なんか』と自尊感情を持ってない子供たちも、心の底ではよりよく生きたいと願っている存在であり、心を通わして指導を重ねれば、必ず自覚や能力が目覚めると信じて仕事をしなければならない」（貝ノ瀬氏）、「一人ひとりの状況を見取り、声をかけていくコミュニケーション能力が全ての基本」（中島氏）、「人間的に真に慕われる、仰がれる人になるべき」（藤田氏）と発言。



藤田朋子氏

また、藤田氏は「授業を難しく、解りづらくしているのは先生。先生自身が興味を持ち、解るように伝える能力のある人でなければならない」と強調し、会場から拍手が湧き起こりました。さらに「学校の先生も毎日一つの舞台をこなしている。アドリブもあれば、話がそれることもある。でも、1年、2年、3年と舞台の終演に向かってどんどん進まなければならない。日々、さまざまな問題や事件が起こる中で、それに対応してくれ、一緒に考えくれるのが学校だ」とし、「自分自身が小学生の頃はどうか、というイマジネーションを働かせる力が大切」と語り、会場はおおいに湧きました。



森山賢一氏

藤田氏の投げかけに対して、教員養成大学の新たな取り組みとして、森山（玉川大学）は「教育の技術は経験だけに基づくものではない」という、教育学者ヘルバルトの言葉を挙げ、理論をしっかりと学ぶことの重要性を訴えました。また、玉川大学の1年次の参加型実習を取り上げ、早い時期からの教育現場での実践の積み重ねとともに、理論と実践を繰り返す相互作用、適性判断の機会を兼ねていることを紹介しました。貝ノ瀬氏は「学び続ける教師、というキーワードは重要。子供にばかり学ぶことを要求するのではなく、教師自身も常に問い直すということが大事である」としました。中島氏は「私たちの仕事は子供たちの成長を目の当たりにできるすばらしい職業。この喜びを思い、自分をさらに磨き、高めていくことが大切」としました。森山（玉川大学）は「学び続ける教師であるためには、養成大学の役割を明確にする必要がある。免許更新講習会など、研究と研修の両立がポイントになるだろう」とまとめました。

最後に藤田氏から、『『尊敬』という定義が崩れてきている社会の中で、教育の役割は大きい。先生方、ぜひ頑張ってください、お願いします』と励ましの言葉をいただきました。

そして、玉川学園理事の高橋貞雄（文学部教授）より閉会の挨拶です。短い時間でしたが、学校の役割、教師養成の方向性など、さまざまな課題を投げかけた有意義なフォーラムの幕が閉じられました。

平成 26 年度

総合的な教師力向上のための調査研究事業 報告書

平成 27 年 3 月発行

編集・発行 玉川大学 教師教育リサーチセンター

〒194-8610

東京都町田市玉川学園 6-1-1

T E L : 042-739-8219

F A X : 042-739-8857

印 刷 日新印刷株式会社